田端文士村記念館

開館20周年記念誌

Tabata Memorial
Museum Of
Writers And Artists

田端文士村記念館

開館20周年記念誌

Tabata Memorial Museum Of Writers And Artists

ごあいさつ

(公財)北区文化振興財団理事長
山田　統二

東京都北区長
花川　與惣太

田端文士村記念館は本年11月4日で開館20周年を迎えることとなりました。

これもひとえに記念館の運営にご協力いただいた皆様のお陰と、心より御礼申し上げます。

田端文士村記念館はアスカタワーの建設に際し、もっともこの田端の地に相応しい公共施設として、設置が決定したものであります。より自由な発想で記念館にふさわしい運営を行うため、北区文化振興財団が企画・運営を行うこととなりました。

明治中期から終戦時まで、芥川龍之介、板谷波山、岩田専太郎、萩原朔太郎、林芙美子、平塚らいてう、堀辰雄、村上元三、室生犀星、吉田三郎等々、綺羅星のごとく多くの文人・芸術家がこの地で様々な活動を行い、日本のモンマルトルとも称されました。この田端文士村を紹介するため、運営方法や展示方法等多くの方々のご助言やご提案をいただき、現在の田端文士村記念館が形作られました。

現在では、来館者も年間1万人を越え、北区だけでなく遠方からお見えになる方も多く、北区を代表する施設の一つとなっております。

「ひとときの散歩」や「講演会」などの事業も高い評価を受けておりますが、今年度は20周年記念として、6月に荒川洋治氏、10月には川本三郎氏の講演会、10月から11月にかけましては企画展の開催など、20周年に相応しい内容の行事を実施し、多くの皆様にお出でいただきました。

9月から10月にかけては、モザイク作家板谷梅樹氏（板谷波山氏のご子息）の回顧展をご遺族のご協力の下に開催するなど、新たな取り組みも行っております。

また、今年度は、板谷波山氏から画家の南薫造氏へ宛てた書簡3通、南薫造氏から板谷波山氏に贈った油絵、板谷波山氏の日常を映した映像、そして彫刻家吉田三郎氏の作品など、大変貴重な品々の寄贈をいただくなど、収蔵品の充実も着実に進んでおります。

今後も様々な角度から田端文士村の調査・研究を行い、記念館としての機能のより一層の充実を図り、文士村のかつてあった姿を多くの方々に紹介してまいりたいと思っております。

これからも皆様のご支援・ご協力をお願い申しあげまして、20周年のご挨拶とさせていただきます。

田端文士村記念館が開館20周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

明治20年の東京美術学校（現東京芸術大学）の設立を契機として、小杉放庵、板谷波山をはじめとする芸術家や芥川龍之介、室生犀星といった作家の方々がこの田端の地に暮らし、お互いに切磋琢磨しながら素晴らしい作品を生み出していきました。

これらの方々の業績を記念し、広く紹介するためにこの記念館が設立されたものでございます。

設立時のご苦労は多くの方々に伺ったところですが、現在までの歩みを振り返ってみますと、文士村記念館としての役割を十分に果たしてこられたと、感慨を新たにしております。

これも、日々研鑽に励む研究員の方々、そしてこの記念館を地域の大切な施設として支えてくださった田端地区の皆様のお陰と、改めて感謝申し上げたいと存じます。

さて、私は区長就任以来、区民の皆様が、北区に生まれ、北区に暮らせてよかった、と思えるふるさとづくりを目指し全力を傾けてまいりました。

ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持つためには、ふるさとの歴史・文化を正しく知ることは非常に重要なことと思っております。

先人の方々が、ここ田端で育んできた田端文士村の歴史を継承し後世に伝えていくことは、新しい北区を作っていく上でも非常に大切なことと考えます。

田端文士村そのものは残念ながら、先の大戦の空襲をうけその面影を偲ぶ術もありませんが、この田端の地に多くの芸術家・文士が集い輝かしい歴史の一齣（こま）を作ったことを何時までも伝えていっていただきたいと存じます。

この記念館が北区の人々のみならず、文士村に関心をお持ちの多くの人々に支えられ、ますますその存在意義を発揮できるよう行政としても一緒になって取り組んでまいりますので、皆様におかれましても、今後とも田端文士村記念館に一層のご支援とご協力をお願いして、祝辞とさせて頂きます。

開館20周年によせて

田端地区自治会連合会会長
竹腰　里子

北区青少年田端地区委員会会長
浅香　俊夫

田端文士村記念館開館20周年まことにおめでとうございます。

私たちの住む北区田端は、明治の終わりから大正、昭和の初期にかけて、実に多くの文士や芸術家が住み、室生犀星は田端を「詩のみやこ」と称し、芥川龍之介は武蔵野の面影の残る田端をこよなく愛したといわれております。このことは、文士や芸術家の人間味溢れる交流とともに、近藤富枝さんの著書『田端文士村』によって世に紹介され、田端は日本のモンマルトルとして脚光を浴びたのです。

この素晴らしい、田端の歴史を後世に伝えていくために「田端文士村記念館」が創立されたことを、住民の一人として心から感謝しております。来館された方々が作品やビデオを熱心に鑑賞されているのを拝見しとても嬉しくおもいます。「田端ひととき散歩」として、文士村にゆかりのある作家の紹介の企画、また、ホールでの様々な文化的行事も楽しみにしております。

昭和58年頃になりますが、由緒ある町の歴史を資源として活性化に繋げたいという思いで、「田端多夢多夢メンバーズ」というグループを結成しました。田端のことを子どもたちや地域の人々に知らせ、さらに外に向けてPRしていくために郷土史づくりに取り組んだり、平成元年に開催された「田端芸術家村」イベントの実行委員として中心となり活動しました。郷土史には、かつて田端に在住した文化人たちの足跡や、故吉田秀世先生の筆による似顔絵が掲載されています。北区の活性化第三弾として実施された「田端芸術家村」では、芥川龍之介の「羅生門」の上演をはじめ模擬店、多彩なステージ等々で10万人以上の入場者があり大成功でした。「田端芸術家村」の跡地に「田端文士村記念館」が開設されたのも何かの縁でしょうか。

今、田端の町も区画整理等で大きく様変わりしましたが、「田端文士村記念館」が有ることで、多くの文化人が存在した田端の歴史は確実に後世に伝わっていくと信じています。

田端文士村記念館が開館20周年と聞き「まだ20年」いや「もう20年」という交差した気持ちでしたが、すでに地域の活動拠点の大切な施設として定着している証だと思います。

記念館の場所は戦後すぐに旧国鉄の病院と官舎が建てられ、同級生もいました。病院の玄関付近には手足に包帯を巻いた人がタバコを吸っているのを見ながら通学をし、すぐ脇の「江戸坂」沿いにはバラック建ての居酒屋やバーが建ち並び、ハイボール30円の看板などもあり戦後の風情が残っており、又田端大橋は現在歩行者専用ですが、日本で初めての鋲を使っていない全溶接工法の橋だと習い、何となく誇りに思っていました。

記念館の活動により地域では「田端文士村」と機会ある事に口にするようになりましたが、郷土の歴史資産としての認識をいま一歩深めるには文士、芸術家達との日常生活での身近に見聞きしたエピソード等を掘り起こし記録するのも底辺が広く深い「田端文士村」になると思います。

文士芸術家の方々とは時代が違い文献で知るのみですが、唯一板谷波山家とは隣同士の縁があり、ポプラ坂沿いでしたので学校の行き帰りに見かけ、偉い陶芸家とは知らないので「爺さん、何かやってるよ！」位の思いでした。母の話では戦後、窯を作るのに裏庭の土を使ってもらった、とか波山さんが奥さんとケンカすると「しばらく居させてほしい」と時々お茶を飲みに来たとか聞き伝えの思い出しかありませんが、又地域の長老に訊ねると、小杉放庵の三男と友達だとか、ポプラ倶楽部のグランドの造成を見てたとか、音楽関係だった大伯父が芥川龍之介の次男と同級生だと教えてくれたりしてまだまだ知らない事が多く、「草の根リサーチ」により、多くの交友関係が発見されそうです。

区画整理事業により一部地形、景観が変わり、20メートル道路が施工され、街路樹に桜が植栽され、室生犀星の「春さき」の一節「桜の多い田端の村」を今によみがえさせる街づくりを願い、高台通りの桜並木を散歩しながらの一作ではないかと勝手に想像しています。

この地に生まれ育ち、住んでいる幸運に感謝しております。

前評議員
北区社会福祉協議会事務局長
伊与部　輝雄

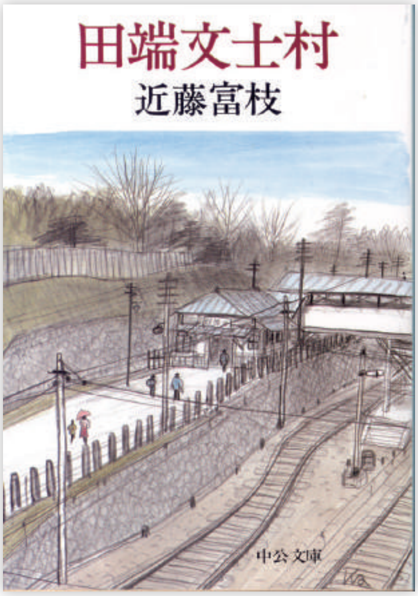
もう20年が経ったのか、というのが正直な感想です。

田端駅前のビル開発にともなって、北区に公共スペースを提供する話があり、そこに文学館、博物館としての「田端文士村記念館」を開設する話がすでに計画化されていて、北区文化振興財団がその運営を担うことが決まっていました。

どのような記念館にするか、どのように運営していくかというのが財団にとって大きな難題でした。それというのも、往時、確かに田端の地には芥川龍之介や板谷波山など多くの作家や芸術家が住まい、まさに文士芸術家村の観を呈していましたが、家屋は戦災でことごとく焼き尽くされ、街を歩いても当時の様子をしのべるものは何も残っていません。また、文学館、博物館としていくための収蔵品も数は少なく、希少価値の高いものもほとんどありませんでした。展示スペースは限られたものに設計されており、区民に貸し出すための多目的室が設計に組み込まれていました。これでは文学館、博物館としての活動は何もできず、名ばかりの文士村記念館になってしまうというので、当時の職員は暗澹(あんたん)としてしまいました。

その時に、貴重なご提言をいただいたのが、企画・運営のアドバイスをしてくださっていた、『田端文士村』の作者近藤富枝先生と、文士芸術家村の一員であった鋳金家内藤春治のご子息である内藤淳一郎先生でした。先生方からの提案は、貸出施設として予定されていた多目的室を文士村記念館の博物館活動の場として位置付け、著名な作家や評論家などを招いて講演会などを開催することで、収蔵品の少なさや屋外資料のないことを補おうというものでした。そして、それぞれの人脈などを活用して、多くの作家や評論家に声をかけてくださり、どこの文学館にもまねのできない講演会を数多く企画してくださいました。

講演会には、区内ばかりではなく遠方から駆けつけてくださる文学ファンも多く、時にはホールに入りきれないほどのお客様にお集まりいただいたときなどは、本当に田端文士村記念館を開設できてよかったなと思ったものです。これからも田端文士村記念館が、北区の文化の発信基地の一つとして活躍していくことを祈念しています。



『田端文士村』近藤富枝
（中央公論新社）

目次

不動坂と田端駅裏口（南口）

ごあいさつ　1

開館20周年によせて　2

目次

田端文士芸術家たちを偲んで

記念館と田端駅　近藤富枝　5

お隣の香取先生　芥川耿子　6

田端　室生洲々子　7

祖父「波山のこと」　村田あき子　8

祖父板谷波山の思い出　板谷駿一　9

「文士村雑感」－板谷先生・室生犀星さんと父の出合い－　吉田渉　10

田端文士・芸術家村－板谷波山夫婦と瓜生岩子－　遠山三穂子　11

祖父　吉村芳松　金沢裕　12

田端ゆかりの文士芸術家たち

田端文士芸術家年表　13

主な田端文士芸術家たち　16

田端文士村記念館のあゆみ

主な出来事・事業年表　20

田端文士村記念館の講演会をふりかえって　26

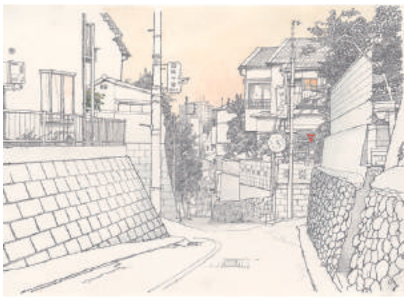
地域との交流　39

研究員今昔　43

田端文士村記念館開館20周年記念事業　47

編集後記

ポプラ坂



与楽寺坂

記念館と田端駅

作家・『田端文士村』著者
近藤　富枝

田端文士村記念館の創立20周年を心からお祝い申します。歴代の館長さんとスタッフの方々の御努力により、往年の田端文士村の気風に忠実に、気品のある運営を続けられたことを古い田端人の一人として感謝しなければなりません。

さて、文士村記念館の建っている場所は私の記憶では以前は鉄道病院の敷地だったように思います。もっと言えば今は上野の科学博物館に展示されている巨大なマンモスの骨が発掘された場所でした。

かつて病院の角から高台にある我が家へむかうだらだら坂（江戸坂）には黒い鉄道の枕木が柵となって続いていました。他のどこの駅にもない田端独特の風景だったと忘れられません。柵にもたれて眺めると遠く尾久方面に向って並べられている何千本のレールが銀色に光り夢の世界にいざなわれるような気分でした。多分田端の芸術家たち、文学者も、画家も、工芸家も心の中でこの風景を詩魂としたように思えてなりません。この牧歌的な黒い柵を覚えている方はもう少ないと思います。

また駅の北口には2台の人力車がいつも客待ちをしていました。昭和4、5年軍靴の音のまだひびかない平和な頃の話です。

当時は東北本線の通るガードの上は立入禁止になっていました。その上に立ち長い列車の通る間を轟音に身を任せるのが子供たちの楽しい冒険でした。ワァーッと大声を挙げ両手を振って帰りました。

思えば今年は板谷波山が田端西台に工房を構えて110年になります。また帝大生だった芥川龍之介が東台に一家と移ってきて来年が100年です。波山も龍之介も田端へ来て珠玉の作品の数々を生み、しかも生涯を田端と共にした方たちでした。

袴を鳴らしながら江戸坂を降りる波山、雨の日ぬかるみに難儀しながら駅にむかう帝大生の龍之介の姿が目にうかんできます。

この日本一の文士村のいろいろをおさめる文士村記念館の今後にいよいよの期待をしております。

お隣の香取先生

芥川龍之介令孫
芥川　耿子

「ところで、お祖父様とは何歳までご一緒でしたか？」

文学には全く関心のなさそうな、とても若いお嬢さんに聞かれ、「私の父が子供の頃に亡くなりましたから、祖父とは会えませんでした。」と言うと、「えーっ」と、彼女はびっくりした様子で私の顔をまじまじと見た。

芥川龍之介という名前も知っているし、写真も時折目にした事もあったらしいのだが、あの若い龍之介と、白髪まじりの私とが、頭の中でごちゃまぜになったらしい。

祖父も田端の家も知らない私が、「お隣の香取秀真先生」とは、よくお会いしていたような気持ちになる。

昔、祖母や母が、「香取先生が家にいらした時に」とか、「香取先生がお隣だったから」とか度々話をしているのを聞いていたせいもあるが、龍之介が先生からいただいたという花瓶の存在が大きい。

香取秀真作の花瓶

先生の作品であるその花瓶は、30センチ程の高さで、広い口の部分から真中にむかって徐々に細くなり、そこから下の方へと再び広がっていくという、曲線の美しいシンプルな花瓶である。

祖母は、四季折々の花をその花瓶に飾っていたが、百合や薄、ガマの穂や白菊など、上にすっと伸びた花が挿してあったような気がする。お正月になると必ず登場するので、その度に香取先生と祖父の交流が思い浮かぶのである。

使いこまれて、年月に重みを感じるその色はあたたかで、親密な二人の芸術家の感性が染みついているように見える。じっと眺めていると、会えなかった祖父龍之介の話したり笑ったりする声が聞こえ、優し気な顔も見えてくる。田端の家の光景までも。

私の家の近所に、かかりつけのお医者様であるO先生のお宅があり、奥様とは長いおつきあいである。

以前、香取先生のお話をしたところ、御子息を通じて香取家とはお知り合いだという。「お隣の香取先生」と「ご近所のO先生」ほんとうに面白い縁である。

田　端

室生犀星令孫
室生　洲々子

室生犀星　昭和8年頃、田端の自宅にて

田端は、馬込や軽井沢、金沢と違った意味で、祖父にとって大切な地であった。大正5年7月から昭和3年6月まで暮らしたこの場所で、詩人から作家への道を拓き、私生活では憧れ続けていた家族を得て温かい家庭を築き始めて、その後を決定づける「時」を迎えている。その縁につながる田端文士村記念館で、昨年の秋、没後50年の記念企画展が開催された。

私は、その関連イベントに出席するために久しぶりに記念館に伺った。

記念館の玄関横に、大きな鉢植えが置かれている。鉢を覆う苔は濃い緑色でみずみずしく、丹精込めて手入れされているのがよくわかる。「この苔が叡山苔でしょうか」と、館長さんが不安げにおっしゃった。「そうです。これが叡山苔です。馬込の庭にあったものより色が濃く、立派ですね。懐かしいです」と言う私の言葉に、ホッとされた様子だった。祖父は庭造りが好きで、苔についてもこだわりを持っていた。その鉢植えの苔は、祖父が大事にしていた苔の子孫といわれているそうだ。皆さんが面倒を見ておられるという。まさか田端の記念館で、叡山苔にお目にかかれるとは思わなかった。苔が好きだった祖父の想いを大切にしてくださっている、記念館の方々の気持ちがとても嬉しかった。

父も母も田端の家で生まれたが、幼い頃に馬込へ引っ越したため、田端での記憶は少なかったようだ。それゆえ我が家では、田端のことはあまり話題にならなかったように思うが、近所に住んでおられた芥川龍之介一家のことは母から聞いたことがある。祖父が影響を受けたこの友人のお宅には、母と同年代のお子さん方がいて、戦争で亡くなられたご次男の多加志さんと幼稚園が一緒だったという。毎朝迎えに来てもらっていたそうだ。祖父は作曲家になられたご三男の也寸志氏に、作詞をした校歌の作曲をお願いするなど、のちのちも何かとご縁があった。田端を「第二のふるさと」と言い、その想いから田端中学校の校歌を作詞したのだろう。

若き日の祖父。まだ元気だった祖母。幼い父、母。我が家の原点である田端。私にとっても大事なところだとしみじみ噛みしめる一日となった。

当館の叡山苔

祖父「波山のこと」

板谷波山令孫
村田　あき子

　器用さは当然のことながら、祖父は子供を遊ばせるのがとても上手な人でした。ハンカチを畳んでねずみを作り、懐からねずみが飛び出し子供達は大騒ぎ。ねずみの形がほんものそっくりなだけではなく、動きも真似て操るのも得意なのです。また泣く子の前で手早く紙を撚り、耳・頭・胴・足・しっぽ…犬が誕生して、いつしか子供は泣き止んで祖父の手先を見つめています。女の子にはバラの花を。これは幾重にも重ねるので少々手間がかかります。

　祖母が亡くなる前、病床で「庭の牡丹はまだ咲かないか」と訊ねているのを聞いて、祖父は夜なべでありあわせの紙を使って牡丹を作り、「一夜で牡丹を咲かせ祖母を喜ばせた」と友義伯父から聞きました。床の上から縁側越しに庭を眺めた祖母は、祖父の仕業を見抜けなかったようです。

　竹とんぼ・凧・独楽・竹馬、すべて作るのも見事、遊ぶのも上手。70才の波山翁は自作の竹馬で走ったり、片足けんけんをして得意になり周囲を心配させていました。沢山作ってもらったおもちゃが何も残っていないのはとても残念です。

祖父板谷波山と共に

　おもちゃ作りもサービス精神の発露と云えますが、常に人を気遣い、心配りを忘れない人でした。女性には着物の話、料理談義と、ユーモアを交え話題も豊富。

　訪問客の子供の湿疹がひどいのを見て、帰られた後、手帖と首っ引きで数種の薬品を煉り合わせた軟膏を作り、送って上げたこともありました。この薬は後々も何人かの方に感謝された妙薬の様です。飽くことなき探究心、骨惜しみしない日常、この生き方すべてが祖父の仕事に重なっていると思います。

　祖父を支え、苦難を共にした祖母は会津女性の強さを持ち合わせていました。行動派で一途に猛進する祖母のことを祖父は陰で「たまらん女史」と呼んでいました。「玉蘭（ぎょくらん）」は日本画を跡見玉枝に学んだ祖母の雅号なのです。祖母の生家ゆかりの地の会津のお菓子屋さんに「たまらん」と名付けたお菓子があります。祖父の密かな陰口を漏らして私が命名のきっかけを作ってしまいました。いずれ彼岸で祖父母に合う日も近いと思う私ですが、このお菓子のことをどのように報告したらよいのでしょうか。

祖父板谷波山の思い出

板谷波山令孫
板谷　駿一

波山は、明治36年、31歳のとき、陶芸家を志し、田端に移り住んでいる。東京美術学校在学中から、故郷の山、筑波山が正面に見えるこの地が気に入り、「工房を作るなら、此処に」と願っていたという。波山の号も筑波山からとった。

しかし、安定した収入を得られる教師の職を捨てての、この大胆な決断を待っていたのは、極端な貧乏暮らしだった。波山は「美術家の歳末」というエッセイのなかで、「私の家はトタン葺きの板屋で、廃屋に近いあばら屋である。つねに破産していて金など無い。だから、私の名は、板屋破産という」と書いている。子供を抱えながら、コメの飯にも事欠く暮らしの中で、ただひたすら美しい焼き物を目指し、なりふり構わず邁進する壮絶な半生であったようである。

しかし、私の知っている晩年の波山は、そうした激しさを微塵も感じさせない、誰に対しても、腰が低く、丁寧で、ユーモアに富む、優しいおじいちゃんだった。とびきりのフェミニスト、だから、女性ファンも多かった。隣家に住む大学生の私が、祖父の家に電話を借りに行くと、私の足音に気づいた祖父が、あわてて「お互い風邪をひかないように、そろそろ電話を切りましょうね」などと、優しい声で電話を切っている。ともに女友達に

祖父板谷波山と共に

電話するために、90歳の祖父と孫の私が、一台の電話をめぐりバッティングする一そんなこともあった。

相変わらず質素な家に住み、土や釉薬で汚れた手作りの粗末な仕事着を着ていた。だが、それでも、凛とした気品が漂っているように見えた。90を過ぎてもなお毎日、仕事場に入り、制作に没頭する祖父の姿は、生意気盛りの私にも、眩しく映った。今思えば、祖父にも、「老いの愁」があったに違いない。しかし私には、修羅場を潜り抜けてきた人間が辿りついた穏やかな晩年のように見えた。波山が亡くなって今年は50年、各地で回顧展が催される。

「文士村雑感」
―板谷先生・室生犀星さんと父の出合い―

吉田三郎令息

吉田　渉

明治の半ば以降、田端に多くの文士、芸術家が集い、その人々が、数々の足跡を残して、世に知られる田端文士芸術家村が誕生しました。それから約一世紀の歳月が経つことになります。何と僅か1キロ四方の田端の地に、これ程多くの著名作家、美術家が居住した事は、誰しもの驚きであり、多くの人が注目して、その縁（えにし）を繙（ひもと）こうとしています。

この歴史的遺産は、今迄、二つの大きな推進力によって、世に知られるようになりました。一つは、近藤富枝さんの著書『田端文士村』であり、二つ目は、北区の文士村記念館の設立です。これからは、この金字塔を残すべく、活躍した在住の作家らの足跡を正しく伝えて、後世への励みとすることでしょうか。

以前、私が母校、滝野川第一小学校の生徒さん達に、判り易く、文士村を説明した文の中で、これ程多くの優れた作家達が、田端に住んでいたが、田端に著名人が集まったのではなく、田端に移り住んでから、この地で研鑽を積んで大成された、と書いたことがありました。その良い例として、板谷波山先生の偉業を挙げることが出来ます。

板谷先生については、多くの名作を集めた、出光美術館、出地である茨城県下館市（現筑西市）、陶芸の道を開いた石川県金沢市が、偉業を顕彰しておられます。夫々の誇りもさることながら、その数々の秀作を生んだ所が、田端の一隅の夫婦窯（めおとがま）であり、この地で、天下の波山芸術が出来上った事を、何よりも誇りにしたい、と思うのは、私達が田端在住の故でしょうか。

思えば、波山先生と父は、金沢での出合いに始まり、そのご縁は深く、田端に新居を構えた折も、土地の保証人になって戴きました。その証文は、今でも大切に保存して在ります。

長い間、いろいろと御恩情を受けた中で、軍人だった私の兄が、若くして他界した際、いたく同情され、観音像を自ら描かれた上これを使いなさい、と香炉を戴いたこともあります。その慈愛に満ちた、高潔なお人柄の思い出は尽きません。

田端村には、金沢出身の作家達が多く集まりました。金沢からは、文化を重んじた加賀百万石の伝統ゆえに、軍人よりも多くの文人が育ちました。室生犀星さんもその一人であり、父の少し後に、田端村にやって来られました。犀星さんと父との間のエピソード等は、色々な本の中にも紹介されています。晩年、父が私に「今度、犀星君の首を作るんや」と話してくれたことも思い出しますが、これは果たせませんでした。

二人は同じ明治22年、犀星さんは3月生まれ、父は2ヶ月後の5月生まれ。又、世を去ったのも同じ昭和37年、申し合わせたように同じ月の3月、犀星さんは、父より10日遅れて他界されました。父の通夜に、室生朝子さんが、お悔やみに来られ、その旬日後に、私が室生家のご葬儀に伺いました。二人は全く同じ位階勲等を授り、あの世で仲良く、金沢弁で、田端時代の思い出話でもしているのではないでしょうか。私達は今も田端に住む二代目ですが、早晩、消え去る身、語り部として田端の歴史をしっかりと、後世に伝えてゆかねば、と感じて居ります。

※吉田渉氏は、平成25年6月5日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
今回の原稿は、『田端文士村記念館だより 第3号』（平成8年2月10日発行）へのご寄稿を一部省略して掲載させていただきました。

田端文士･芸術家村
―板谷波山夫婦と瓜生岩子―

浅香家御関係者
遠山　三穂子

田端文士村は、上野の森と地続きで東京美術学校（現・東京芸術大学）に近かったこともありますが、実は陶芸家板谷波山が住んでいたことで多くの芸術家や文人が集まったといわれています。

文士村の中心人物である板谷波山は、東京美術学校彫刻科を卒業後、石川県工業高校で教鞭を執りますが、途中彫刻科が廃止になり、校長から懇願されて陶磁科の教師になります。そこで陶磁器の研究や修業を重ねるうち陶芸家となる思いが強くなり、再び上京して田端に移り住みます。この地に窯を築いたきっかけは、波山夫婦の仲人である瓜生岩子の存在が大きかったようです。

瓜生岩子は、会津出身の慈善・社会事業家で、「日本のナイチンゲール」「社会福祉の母」と讃えられ、女性では最初の藍綬褒章を受章しました。一方、波山の妻まるも会津出身で、同郷の瓜生岩子を尊敬し、生涯に亘って人生の師と仰ぎました。

まるは、明治21年に上京し、共立女子職業学校（現・共立女子大）に入学。岩子が明治24年、実業家渋沢栄一に招かれて上京し、東京養育園で身寄りのない子供たちの救済にあたっている頃、岩子の内弟子となります。その後、東大赤門前にある岩子の孫祐次郎の薬局に、岩子の用事でまるが出入りし、近くに住んでいた波山が買物に来ていた縁で二人は出会い、明治28年に岩子の媒酌で結婚。明治36年9月、祐次郎の義姉の実家（現・田端3丁目浅香俊夫宅）の土地に移り住むことになりました。浅香家は数百年続く庄屋で、波山はよく材料となる陶土を譲り受けに来たそうです。板谷家の生活は苦しく、夫婦の内職などで資金をためてレンガを買い、二人で1年3ヶ月かけて窯を築きました。その後、独特の釉薬と彫文様で格調高い作品を創り、工芸界では初めて文化勲章を受章しました。

この話の舞台となった田端は、戦後間もなく区画整理事業が始まり、その後、半世紀以上経ってもいまだ完遂の見通しが付かず、どこを歩いているのか分からないほど様変わりしてしまいました。板谷波山の家も壊されましたが、学習院大学教授荒川正明先生の御助力で、波山の家の土台や陶片などは、郷里下館の有志や学生の皆さんが丁寧に発掘して、下館の波山記念館に納められました。

今では文士村記念館が唯一、文士村の存在を伝える場となりましたが、貴重な史跡でもある田端文士村を後世に伝えるため、田端の住民が文士村記念館を支えて活動しなければならないと思います。

祖父　吉村芳松

吉村芳松令孫
金沢　裕

小学校5年生のある朝。「じいちゃん」の様子が変だ、息をしていない、と家族の話し声が聞こえました。祖父「吉村芳松」の自宅で眠ったまま目覚めない大往生でした。理由もわからず、眠るような「じいちゃん」の唇に水を含ませた綿をあてがい、湿らせた事を記憶しております。そして自宅での葬式。これについての記憶は全くありません。子供の頃から家に「絵」があるのが当たり前でした。しかし、その理由は判りませんでした。

私にとって祖父は、いつも和服を着て、炬燵に入っている、何もしていない「じいちゃん」でした。その頃は白黒テレビが普及しはじめで、ある時、私が漫画の番組を見ていると、じいちゃんが「絵がまずい」と一言。当時、今の土地の端に「画室」がありましたが、絵を描いている痕跡は無く、描いている「じいちゃん」を見たこともありませんでした。絵描きの祖父の事を私の両親もあまり語る事はありませんでした。記憶しているのは、父が「じいちゃんは、絵を描いても売ることを知らなかったので自分が売った」「日展で無監査」位でしょうか。

芳松の長女である母からも聞いた記憶がありません。母、父と他界後、遺品整理をし、沢山の洋画（未完成も）、色紙、デッサン、墨絵、下絵が現れました。個人で持つには相応しくない大きさの作品数点は、北区に寄贈させて頂きました。これらと並行して「じいちゃん」でなく「洋画家 吉村芳松」について私なりに調査を始めました。

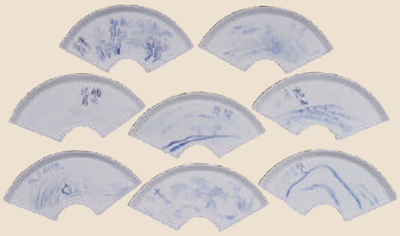
ちょうど100年前の大正2年（1913年）現東京芸大を卒業と同時に田端の光明院に寄宿していた芳松は、住職の好意で敷地内の100番地に住居をかまえます。やがて、いきさつは不明ですが、ある姉妹の妹と結婚。姉の方は洋画家「田辺至」と結婚し、1軒置いた隣りに居住しました。芳松は牛を描くのが得意だったらしく、庭で牛を飼い、家の柱は赤色や緑色で、常人とはいささか異なっていたようです。いくつかの美術団体を共同で立ち上げ、絵画教室もやっていたらしく、プロの弟子では知る限り、台湾、盛岡、三重、福岡の人がいました。

私が小学生低学年のころ、学校の水彩画の宿題でクレヨンを加えて仕上げる方法を教わった記憶があります。母から「じいちゃん」のことをもっとよく聴いておけば良かったと思っています。吉村芳松作品は今の我が家に精いっぱいかかげております。なお、北区に寄贈した大型作品4点は田端文士村記念館で2012年5月から10月に展示していただきました。

田端ゆかりの文士芸術家たち【田端文士芸術家年表】

田端転入転居年		文士芸術家名《職業　生年－没年》（居住期間）	主な出来事
明治22年	1889		東京美術学校（現東京芸術大学）開校
明治29年	1896		田端駅開業
明治33年	1900	小杉未醒（放庵）《洋画家･日本画家　1881-1964》（～ 1945）	
明治35年	1902	正岡子規《俳人･歌人　1867-1902》（田端大龍寺に墓所）	＜太平洋画会＞結成
明治36年	1903	板谷波山《陶芸家　1872-1963》（～没年）	
明治37年	1904	二葉亭四迷《小説家･翻訳家　1864-1909》（約半年）	
明治38年	1905	林きむ子《舞踊家　1884-1967》（～ 1915）	
明治40年	1907	下島勲《医師･書家　1870-1947》（～ 1937）	『方寸』創刊
		吉田三郎《彫刻家　1889-1962》（～没年）	
		山田敬中《日本画家　1868-1934》（～没年）	
明治41年	1908	片山潜《社会主義運動家　1859-1933》（転出不詳）	『アララギ』創刊
明治42年	1909	香取秀真《鋳金家･歌人　1874-1954》（～ 1945）	山手線（品川－赤羽、池袋－田端）開通
明治43年	1910	池田勇八《彫刻家　1886-1963》（～ 1945）	＜ポプラ倶楽部＞創設
		吉田白嶺《木彫家　1871-1942》（～ 1919）	
明治44年	1911	山本鼎《洋画家・版画家　1882-1946》（～ 1917）	『青鞜』創刊
		直木三十五《小説家　1891-1934》（～ 1912）	
		平田禿木《英文学者･随筆家　1873-1943》（～ 1929）	
明治45年	1912	鹿島龍蔵《実業家　1880-1954》（～ 1944）	
		柚木久太《洋画家　1885-1970》（～ 1941）	
		小川三知《ステンドグラス作家　1867-1928》（～没年）	
大正 2 年	1913	岡倉天心《思想家･美術評論家　1862-1913》（約 2 ヶ月）	
		倉田白羊《洋画家　1881-1938》（数ヶ月）	

吉田三郎「板谷波山像」



「大雅堂瀟湘八景扇面小皿」
（小杉放庵画／板谷波山作陶）

小杉放庵『新訳絵本西遊記』

小杉放庵「母」

「ポプラ倶楽部ジュニアトーナメント・トロフィー」（小杉放庵画／香取正彦鋳造）

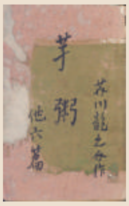
池田勇八「秣（まぐさ）」

香取秀真『金工史談』

田端文士芸術家年表

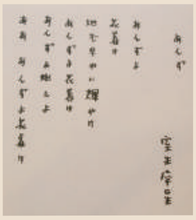
田端転入転居年	文士芸術家名《職業　生年－没年》（居住期間）	主な出来事
大正 3 年　1914	芥川龍之介《小説家　1892-1927》（～没年）	『新思潮』（第三次）創刊 日本美術院再興 二科会創設
	池田輝方《日本画家　1883-1921》（～没年）	
	池田蕉園《日本画家　1886-1917》（～ 1917）	
	押川春浪《冒険小説家　1876-1914》（約 4 ヶ月）	
	村山槐多《洋画家・詩人　1896-1919》（～ 1916）	
	小山栄達《日本画家　1880-1945》（～没年）	
	田辺至《洋画家　1886-1968》（転出不詳）	
	吉村芳松《洋画家　1886-1965》（～没年）	
大正 4 年　1915	広瀬雄《府立第三中学校校長　1874-1964》（～没年）	
大正 5 年　1916	室生犀星《詩人・小説家　1889-1962》（～ 1928）	『新思潮』（第四次）創刊 『感情』創刊
	石井鶴三《彫刻家・洋画家　1887-1973》（～ 1921）	
	斎藤素巌《彫刻家・洋画家　1889-1974》（～ 1923）	
大正 6 年　1917	多田不二《詩人　1893-1968》（～ 1921）	
	石井柏亭《洋画家　1882-1958》（～ 1945）	
大正 7 年　1918	平塚らいてう《社会運動家・評論家　1886-1971》（～ 1923）	
	鹿児島寿蔵《紙塑人形作家・歌人　1898-1982》（～ 1945）	
	寺内萬治郎《洋画家　1890-1964》（～ 1934）	
大正 8 年　1919	太田水穂《歌人　1876-1955》（～ 1939）	『金の船』創刊 ＜道閑会＞発足 帝国美術院創立
	内藤春治《鋳金家　1895-1979》（～没年）	
	小穴隆一《洋画家・俳人　1894-1966》（転出不詳）	
大正 9 年　1920	堆朱楊成《漆芸家 20 代　1880-1952》（～没年）	
	斎藤佐次郎《出版事業家　1893-1983》（～ 1936）	

芥川龍之介「追憶　勉強」原稿


芥川龍之介『芋粥』

村山槐多
『槐多の歌へる』

芥川龍之介『鼻』


室生犀星「あんず」
色紙（複刻）

室生犀星『杏っ子』

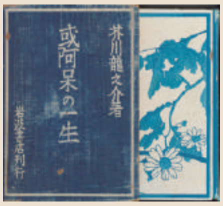
内藤春治「狐」

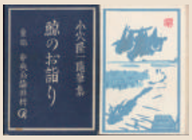
室生犀星「田端村」原稿

室生犀星
『庭を造る人』

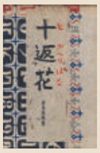
室生犀星『魚眠洞随筆』

芥川龍之介『羅生門』


芥川龍之介『或阿呆の一生』


小穴隆一『鯨のお詣り』

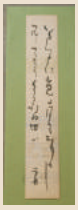
香取正彦「鶏」


室生犀星『十返花』

石井鶴三「菊池寛」色紙

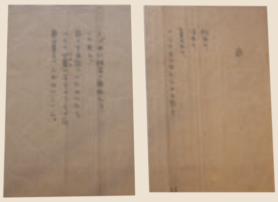
田端転入転居年		文士芸術家名《職業　生年－没年》（居住期間）	主な出来事
大正 9 年	1920	野口雨情《詩人　1882-1945》（約半月）	
		サトウハチロー《詩人・小説家　1903-1973》（～ 1922）	
大正 10 年	1921	瀧井孝作《俳人・小説家　1894-1984》（～ 1922）	
		竹久夢二《画家・詩人　1884-1934》（約半月）	
大正 12 年	1923	菊池寛《小説家・劇作家　1888-1948》（約 3 ヶ月）	『文藝春秋』創刊 / 関東大震災発生
大正 13 年	1924	窪川鶴次郎《詩人・評論家　1903-1974》（～ 1926）	
		堀辰雄《小説家　1904-1953》（～ 1927）	
		林芙美子《小説家　1903-1951》（約 3 ヶ月）	
大正 14 年	1925	萩原朔太郎《詩人　1886-1942》（約 8 ヶ月）	
		土屋文明《歌人　1890-1990》（約 10 ヶ月）	
大正 15 年	1926	岩田専太郎《挿絵画家　1901-1974》（～ 1945）	『驢馬』創刊
		佐多稲子《小説家　1904-1998》（約半年）	
昭和 2 年	1927	川口松太郎《小説家・劇作家　1899-1985》（～ 1930）	芥川龍之介の自死（7月24日未明）
昭和 3 年	1928	浜田庄司《陶芸家　1894-1978》（約 1 年）	
昭和 4 年	1929	田河水泡《漫画家　1899-1989》（～ 1931）	
		小林秀雄《評論家　1902-1983》（～ 1931）	
昭和 5 年	1930	中野重治《小説家・詩人　1902-1979》（～ 1931）	
		高田浪吉《歌人　1898-1962》（～ 1935）	
		香取正彦《鋳金家　1899-1988》（～ 1945）	
昭和 6 年	1931		谷田川改修、暗渠になる
昭和10年	1935		田端駅前通り、切り通し完成 / 芥川賞・直木賞創設
昭和13年	1938	村上元三《小説家　1910-2006》（～ 1945）	
昭和20年	1945		4月13日の空襲により、壊滅的な被害を受ける

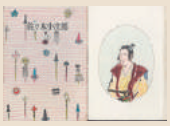
野口雨情書画「かにさんごはんたき」


野口雨情短冊

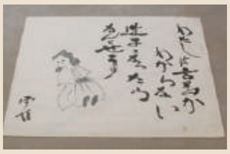
竹久夢二『露臺薄暮』（初版複刻）

竹久夢二「自画像」

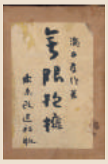

萩原朔太郎「亀」原稿


村上元三『佐々木小次郎』（上）

浜田庄司『無盡蔵』


野口雨情書画「青い眼の人形」

石井柏亭『山河あり』

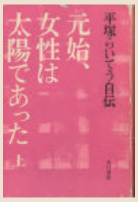

瀧井孝作『無限抱擁』

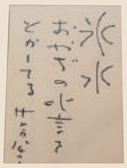
野上豊一郎『クレオパトラ』

菊地寛『藤十郎の恋』

佐多稲子『キャラメル工場から』

池田蕉園『やへかすみ』


平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』（上）


サトウハチロー 色紙「氷水おやぢの小言をとかしてる」

サトウハチロー『僕の東京地図』

土屋文明色紙

萩原朔太郎『純情小曲集』

小林秀雄『無常といふ事』

田河水泡「のらくろ」色紙

中野重治『夜明け前のさよなら』

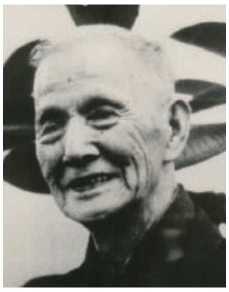
主な田端文士芸術家たち

芥川龍之介 書斎風景

あくたがわ　りゅうのすけ
芥川　龍之介
明治25年（1892）～昭和2年（1927）
小説家
東京都 中央区出身。大正3年、一家で田端435（現1-20）番地に新築転入。東京帝国大学時代、久米正雄、菊池寛、山本有三らと第三・四次『新思潮』を創刊。夏目漱石門下に加わり、「羅生門」「鼻」等を次々と発表、一躍文壇の寵児となる。たぐいまれなオ気と下町人特有の世話好きな性格は多くの人々をひきつけ、田端文士芸術家村の中心的人物として大きな役割を果たす。昭和2年7月、「唯ぼんやりした不安」という言葉を遺して自らの命を絶つ。

いしい　はくてい
石井　柏亭
明治15年（1882）～昭和33年（1958）
洋画家
東京都 台東区出身。日本画家・石井鼎湖（ていこ）の長男。大正6年、日暮里渡辺町筑波台1035番地に転入。10歳の時、日本美術協会に日本画を初出品。明治35年、太平洋画会会員になる。明治40年、山本鼎、森田恒友らと雑誌『方寸』を創刊。日本の洋画形成期に活躍。

いけだ　ゆうはち
池田　勇八
明治19年（1886）～昭和38年（1963）
彫刻家
香川県出身。明治43年、田端521（現5-5）番地にアトリエを建て転入。文展、帝展などで活躍。帝展審査員、ロサンゼルスおよびベルリンオリンピックの芸術部審査員などを歴任。題材を一貫して動物生態にもとめた造形表現を完成し、主に馬像を制作していたことから「馬の勇八」の異名をもつ。明治・大正・昭和天皇の御料馬像を制作。



いたや　はざん
板谷　波山
明治5年（1872）～昭和38年（1963）
陶芸家
茨城県 筑西市出身。石川県工業学校で7年間教鞭をとったのち、明治36年、田端512（現3-24）番地に転入。1年3か月かけて田端に窯を築く。白磁、青磁、彩磁等に格調高い作品を遺した。帝国美術院賞受賞、文化勲章受章。独特な釉薬（うわぐすり）と彫文様とで近代陶芸界の先駆的指導者として活躍。

いしい　つるぞう
石井　鶴三
明治20年（1887）～昭和48年（1973）
彫刻家・洋画家
東京都 台東区出身。日本画家・石井鼎湖（ていこ）の三男。大正5年、田端282（現1-10）番地に転入。大正11年、小杉放庵、倉田白羊らが創立の「春陽会」客員となる。昭和2年、放庵が発起の「老荘会」に参加。日本創作版画協会などにも関与。また、挿絵や相撲彫刻に新境地を開く。相撲協会横綱審議委員会初代委員。石井柏亭は長兄にあたる。

いわた　せんたろう
岩田　専太郎
明治34年（1901）～昭和49年（1974）
挿絵画家
東京都 台東区出身。大正15年、田端476（現5-2）番地、昭和6年、404（現1-23）番地に居住。吉川英治「鳴門秘帖」などに挿絵を描く。新聞、雑誌を舞台に、多彩なジャンルの第一線で挿絵画家として活躍、江戸浮世絵最後の美人画家とうたわれ、「専太郎ばり」の画風で知られた。長年の挿絵、表紙絵の功績により、昭和29年菊池寛賞、昭和36年紫綬褒章受章。

おあな　りゅういち
小穴　隆一
明治27年(1894)～昭和41年(1966)
洋画家・俳人
長崎県出身。大正8年、田端380（現1-27）番地の下宿「新昌閣」に寄宿(推定)。開成中学中退後、太平洋画会研究所で中村不折に師事、二科会・春陽会などで作品を発表した。大正8（1919）年に芥川龍之介と知り合って以来、書画や俳句などを通じて親交を結んだ。芥川が子供たちにあてた遺書に「小穴隆一を父と思へ……」とあり、その信頼の深さがうかがえる。俳号・一游亭(いちゆうてい)。

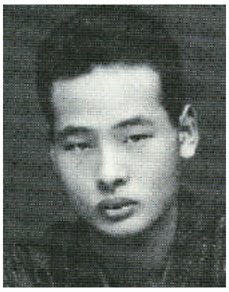
かわぐち　まつたろう
川口　松太郎
明治32年(1899)～昭和60年(1985)
小説家・劇作家
東京都 台東区出身。昭和2年頃、田端476（現5-2）番地（岩田専太郎の隣家）に転入。大正4年、久保田万太郎に師事。関東大震災後、大阪に移り直木三十五らと雑誌『苦楽』を編集。劇団主事、映画会社重役も務める。直木賞、菊池寛賞、吉川英治文学賞、文化功労賞などを受賞。

おかくら　てんしん
岡倉　天心
文久2年(1862)～大正2年(1913)
思想家・美術評論家
神奈川県 横浜市出身。大正2年、田端147(現3-15)番地に仮寓。明治22年の東京美術学校（現東京芸術大学）開校と同時に幹事となり、翌年校長に就任。明治31年、非職命令をうけ辞職、日本美術院を創設。米国ボストン美術館顧問、文展審査員などを歴任。日本美術を世界に紹介した明治美術界の先覚者。

きくち　かん
菊池　寛
明治21年(1888)～昭和23年(1948)
小説家・劇作家
香川県出身。大正12年、田端523（現5-5）番地（室生犀星転出の空家）に転入。芥川龍之介らと第三・四次『新思潮』を創刊。「藤十郎の恋」「父帰る」などの戯曲も発表し文壇に清新な風を送る。文芸春秋社を起こし、芥川賞や直木賞創設による後進の育成など、文化活動にも幅広い功績を残す。

おしかわ　しゅんろう
押川　春浪
明治9年(1876)～大正3年(1914)
冒険小説家
愛媛県 松山市出身。大正3年、田端494(現5-3)番地に転入するも、数か月後に没する。東京専門学校（現早稲田大学）在学中に「海島冒険奇譚・海底軍艦」を発表。当時の科学思想を盛った空想冒険小説家として名をあげ、SF小説の先駆となる。小杉放庵らと雑誌『武侠世界』を創刊。

こすぎ　ほうあん
小杉　放庵
明治14年(1881)～昭和39年(1964)
洋画家・日本画家
栃木県出身。明治33年、田端163(現3-4)番地
　寄宿。同40年、155(現3-16)番地(谷田川畔)に新築転居。明治35年、太平洋画会会員となる。雑誌『方寸』の同人として画文双方で活躍。明治43・44年頃、山本鼎・森田恒友らとポプラ倶楽部を創設。渡欧後、横山大観に請われて再興日本美術院洋画部を主宰。大正12年まで「未醒」と号す。晩年は俳味の強い日本画に転じる。鹿島龍蔵の援助を受け「春陽会」を創立。



かごしま　じゅぞう
鹿児島　寿蔵
明治31年(1898)～昭和57年(1982)
紙塑人形作家・歌人
福岡県出身。大正7年、田端350(現1-15)番地に転入し、同9年、349(現1-15)番地、昭和2年、380(現1-27)番地、同7年、46(現4-5)番地と居住。紙塑人形制作で人間国宝に認定される。また、歌人・島木赤彦に師事し、アララギ派歌人として歌壇でも活躍。アララギ選者、機関誌編纂などに携わる。

こばやし　ひでお
小林　秀雄
明治35年(1902)～昭和58年(1983)
評論家
東京都 千代田区出身。昭和4年、田河水泡宅田端155(現3-16)番地に転入。同地で書き上げた「様々なる意匠」により文壇に登場。個性的な自意識を確認し、自己の生き方を基盤とすることで批評を展開、近代文学批評を確立。文化勲章受章。実妹・高見沢潤子は田河水泡夫人。

かとり　ほつま
香取　秀真
明治7年(1874)～昭和29年(1954)
鋳金家・歌人
千葉県出身。明治42年、田端433（現1-20）番地に転入。大正6年、438（現1-20）番地に転居（芥川龍之介の隣家）。帝室技芸員、帝国芸術院会員など務めた鋳金界の第一人者。明治41年、東京鋳金会を設立。昭和28年、文化勲章受章。古代金工史の研究にも業績をあげる。正岡子規門下で根岸短歌会にも参加した歌人としても知られ、歌集も刊行。滝野川町議会議員も務めた。

さた　いねこ
佐多　稲子
明治37年(1904)～平成10年(1998)
小説家
長崎県出身。大正15年、駒込神明町に下宿。幼少期から貧困と数奇な環境からか厭世的人生をおくるが、女給として勤めたカフェー「紅緑」で『驢馬』の同人らと知り合い、人生、文学両面で開眼。のち、同人の一人窪川鶴次郎と結婚する。左翼運動に身を投じ活躍。女流文学賞、川端康成賞などを受賞。

かとり　まさひこ
香取　正彦
明治32年(1899)～昭和63年(1988)
鋳金家
東京都 文京区出身。香取秀真の長男として誕生。昭和6年、秀真宅から独立し、田端500(現2-10)番地に転居。帝展、日展などで活躍。昭和28年、日本芸術院賞受賞。昭和42年、広島平和の鐘を制作・寄進。「平和余韻の鐘」と銘うった梵鐘づくりに生涯をささげ、全国各地に150を超える名鐘を残す。人間国宝に認定。

サトウ　ハチロー
明治36年(1903)～昭和48年(1973)
詩人・小説家
東京都 新宿区出身。正岡子規門下の佐藤紅緑の長男として誕生。大正9年頃、福士幸次郎宅田端543(現5-7)番地に寄宿。西条八十に師事し、児童雑誌『金の船』などに童謡を発表、詩壇に地位を確立。昭和初期から、菊田一夫らと浅草軽演劇の台本を書き、「りんごの唄」、「長崎の鐘」などの歌謡曲にも筆をそめる。北区立滝野川第四小学校の校歌を作詞した。作家・佐藤愛子は妹にあたる。

たがわ　すいほう
田河　水泡
明治32年(1899)～平成元年(1989)
漫画家

東京都 墨田区出身。昭和4年、田端155（現3-16）番地に転入。日本美術学校在学中、前衛美術団体「マヴォ(MAVO)」に参加。昭和2年、講談社の雑誌に漫画を描き始める。昭和6年、「のらくろ」で一躍人気漫画家となる。小林秀雄の実妹高見沢潤子は妻。

なおき　さんじゅうご
直木　三十五
明治24年(1891)～昭和9年(1934)
小説家

大阪府出身。明治44年、早稲田大学入学時に上京、田端149(現3-16)番地に友人と下宿を借り1年余り暮らした。関東大震災で大阪に戻っていた三十代前半から小説を発表し始めるが、このころ後に田端文士となる川口松太郎・岩田専太郎と知己を得た。「南国太平記」などの時代小説で流行作家となり、没後は友人の菊池寛により「直木三十五賞」が創設された。

たきい　こうさく
瀧井　孝作
明治27年(1894)～昭和59年(1984)
俳人・小説家

岐阜県出身。大正10年、室生犀星の旧宅の田端571（現6-4）番地に転入。『時事新報』の文芸部記者となり芥川龍之介を、ついで『改造』の記者時代に志賀直哉を知り生涯に渡り交流する。遊廓で出会った最初の妻・榎本りんとの恋とその死を描いた長編小説「無限抱擁」は、田端時代を描いた作品。日本文学大賞を受賞。俳号・折柴(せっさい)。

なかの　しげはる
中野　重治
明治35年(1902)～昭和54年(1979)
小説家・詩人

福井県出身。昭和5年、田端445(現2-12)番地に転入。同年、思想弾圧により田端駅で逮捕。金沢の第四高等学校在学中に室生犀星を知り、窪川鶴次郎とも親交をかさねる。大正15年、堀辰雄、窪川らと雑誌『驢馬』を創刊。昭和3年にはナップ（全日本無産者芸術連盟）を結成。すぐれたプロレタリア小説を書く。戦後は、参議院議員としても活躍。

たけひさ　ゆめじ
竹久　夢二
明治17年(1884)～昭和9年(1934)
画家・詩人

岡山県出身。大正10年頃、モデル・お葉宅田端156（現3-16）番地に寄宿。苦学時代、投稿したスケッチ文が読売新聞に掲載。一時、文学を目指したが、転じて絵画の道に専心。放浪の生活と悲恋によって傷ついた心を、絵と詩の中に純粋に表現する「夢二式美人画」は、明治末から大正初期にかけて一世を風靡する。

のぐち　うじょう
野口　雨情
明治15年(1882)～昭和20年(1945)
詩人

茨城県出身。大正9年、田端351(現1-15)番地の「金の船（金の星）社」編集部に寄宿。児童雑誌『金の船』に童謡を発表するようになり、以後北原白秋とならんで童謡運動の推進者となる。「十五夜お月さん」「七つの子」「赤い靴」など、今もって愛されている作品が多い。

ついしゅ　ようぜい
堆朱　楊成
明治13年(1880)～昭和27年(1952)
漆芸家

東京都 台東区出身。大正9年、田端430（現1-20）番地に転入。同11年、435(現1-20)番地(芥川龍之介の隣家)に新築移転、堆朱御殿と呼ばれる。堆朱彫家の二十代目で、彫漆の意匠や彫技に時代感覚を加えた工夫を取り入れ新境地を開く。帝展、文展、日展などの審査員を務める。日本芸術院会員。

はぎわら　さくたろう
萩原　朔太郎
明治19年(1886)～昭和17年(1942)
詩人

群馬県出身。大正14年、室生犀星の世話で田端311(現2-4)番地に8か月間居住。犀星の詩「小景異情」に感動し、親交がはじまる。大正5年には犀星と二人で雑誌『感情』を創刊。翌年、第一詩集『月に吠える』を刊行。口語自由詩の実質的な完成をみる。鋭敏な感覚で現代人の心の奥底を描き、詩壇にゆるぎない地歩を築く。

つちや　ぶんめい
土屋　文明
明治23年(1890)～平成2年(1990)
歌人

群馬県出身。大正14年、田端500(現2-10)番地に転入。中学卒業とともに伊藤左千夫に師事。斎藤茂吉らと『アララギ』創刊に参加。芥川龍之介らと第三・四次『新思潮』を創刊。昭和5年から『アララギ』編集責任者。文明調と呼ばれる独自の歌風を築く。歌論書、万葉集研究書も刊行、文化勲章受章。

はまだ　しょうじ
浜田　庄司
明治27年(1894)～昭和53年(1978)
陶芸家

神奈川県出身。昭和3年、田端495(現2-11)番地に転入。大正9年、陶磁器研究のため渡英。帰国後、柳宗悦らと民芸運動を推進。栃木県益子に居を定め、同地の陶土、釉薬(うわぐすり)を基本とし、沖縄をはじめ日本各地の民窯雑器のもつ健康的な美しさを吸収、素朴で重厚な作風を確立。文化勲章受章。人間国宝に認定。

ないとう　はるじ
内藤　春治
明治28年(1895)～昭和54年(1979)
鋳金家

岩手県出身。大正8年、香取秀真宅田端438（現1-20）番地に内弟子として住み込む。香取秀真・正彦親子が古典的な作風であるのに対して、前衛的な作品が多い。昭和9年、田端114(現3-13)番地にアトリエを築き、翌年転居。同27年、田端124（現3-20）番地に新築移転。東京美術学校教授などを歴任。同30年、日本芸術院賞受賞。同38年、皇居二重橋架け替えにあたり主桁飾りなどの意匠設計および原型制作にあたる。

はやし　ふみこ
林　芙美子
明治36年(1903)～昭和26年(1951)
小説家

尾道の女学校を卒業し上京した後、さまざまな職業を転々とする中で新劇俳優の田辺若男と知り合い、大正13年4月から3ヶ月間、田端320(現2-10)番地の田辺宅で同棲した。その後、昭和5年26歳で発表した『放浪記』で一躍作家として脚光を浴び、流行作家となった。
※出身地は、山口県下関市、北九州市など諸説あり。

ひらつか　らいちょう
平塚　らいてう

明治19年(1886)～昭和46年(1971)
社会運動家・評論家

東京都 千代田区出身。大正7年、田端445(現2-12)番地に転入。明治44年、婦人雑誌『青鞜』を創刊。大正3年、年下の画家・奥村博史と同棲。主に婦人問題評論家として活躍。大正9年、市川房枝らと新婦人協会を結成。昭和5年、無産婦人芸術連盟に参加。国際民主婦人連盟副会長、日本婦人団体連合会名誉会長など歴任。

やまもと　かなえ
山本　鼎

明治15年(1882)～昭和21年(1946)
洋画家・版画家

愛知県出身。明治44年、田端512(現3-24)番地に転入、大正6年、田端500(現2-10)番地に転居。石井柏亭、森田恒友らと雑誌『方寸』を創刊。大正元年から5年まで滞欧。帰国後、再興美術院洋画部同人となる。大正8年、長野県に日本農民美術練習所(後に研究所と改称)を設立、自由画運動推進など多方面に功績を残す。大正11年、春陽会結成に参加。夫人は北原白秋の妹・家子。

ふたばてい　しめい
二葉亭　四迷

元治元年(1864)～明治42年(1909)
小説家・翻訳家

東京都 新宿区出身。坪内逍遥に師事し、明治19年「小説総論」、翌年言文一致体の「浮雲」を発表。東京外国語学校（現東京外国語大学）教授などを経て、大阪朝日新聞社に入社。明治37年9月から約半年、田端475（現5-2）番地に居住。同39年新聞小説「其面影(そのおもかげ)」を執筆。翻訳にツルゲーネフ原作の『あひびき』『めぐりあひ』がある。
※国立国会図書館蔵

よしだ　さぶろう
吉田　三郎

明治22年(1889)～昭和37年(1962)
彫刻家

石川県 金沢市出身。明治40年、石川県工業学校の師である板谷波山を慕い上京、田端142(現3-14)番地の「大盛館」に下宿。明治45年、田端105（現3-20）番地に転居。東京美術学校時代の同級に建畠大夢、北村西望、斎藤素巌がいる。昭和6年、古代彫刻研究のため文部省から欧州視察を命じられ各国を巡歴。日本芸術院賞受賞。日本芸術院会員、文展・帝展・日展審査員など歴任。同郷の室生犀星が不遇の頃、物心両面の援助者でもあった。

ほり　たつお
堀　辰雄

明治37年(1904)～昭和28年(1953)
小説家

東京都 千代田区出身。大正13年、田端142（現3-14）番地の「大盛館」、38(現4-9)番地の「紅葉館」などに下宿。府立第三中学校の恩師である広瀬雄の引き合わせで室生犀星を、犀星の紹介で芥川龍之介を知り、生涯の師とする。大正15年、中野重治、窪川鶴次郎らと雑誌『驢馬』を創刊。中野らが左翼化していくなかで常に純粋芸術派の道を歩み、昭和5年芥川との交流を描いた「聖家族」で文壇に認められた。

よしむら　よしまつ
吉村　芳松

明治19年(1886)～昭和40年(1965)
洋画家

東京都出身。田端100(現3-21)番地に居住。東京美術学校西洋画科卒。美校在学中から同校先輩の田辺至らと田端にある光明院に下宿、卒業後も光明院敷地内にアトリエを構える。長きにわたって田端で制作活動を行い、帝展・文展・日展に出品。昭和30年、柚木久太らと「新世紀美術協会」を創立。

むらかみ　げんぞう
村上　元三

明治43年(1910)～平成18年(2006)
小説家

朝鮮元山府出身。父の赴任先であった土地の名から命名される。昭和13年頃、田端79(現3-22)番地に転入。昭和9年作の小説「利根の川霧」が映画化。昭和16年、封建美談を描いた短編「上総風土記」で第12回直木賞を受賞。以来、時代小説を書き続け、大衆文壇の流行作家となる。映画シナリオ、テレビ、ラジオの脚本、演出も多く手がけ、昭和40年にはNHK放送文化賞を受賞。

＜文士芸術家以外＞

かじま　たつぞう
鹿島　龍蔵

明治13年(1880)～昭和29年(1954)
実業家

東京都 江東区出身。明治45年、田端650（現6-6）番地に転入。鹿島組(現鹿島建設)取締役。書、篆刻、謡、舞、長唄、狂言、テニス、スケートなど多趣味で、田端の人々との交わりは深い。「春陽会」や「道閑会」などに参加し、田端文士芸術家のスポンサー的存在となった。雅号・唐升。

むらやま　かいた
村山　槐多

明治29年(1896)～大正8年(1919)
洋画家・詩人

愛知県 岡崎市出身。大正3年、従兄の山本鼎の影響をうけ上京、鼎の友人、小杉放庵宅田端155(現3-16）番地に寄宿し洋画を学ぶ。失恋や創作の苦悩から、頽廃と放浪の生活を送り、陰影の濃い青春の哀感を表現したが、結核に冒され若くして生涯を閉じる。耽美主義的文芸作品を著した。

しもじま　いさおし
下島　勲

明治3年(1870)頃～昭和22年(1947)
医師・書家

長野県出身。明治40年、田端348(現1-15)番地に「楽天堂医院」開業。陸軍軍医として日清・日露戦争等に従軍。田端鉄道病院の嘱託医師を勤める。開業後、多くの文士芸術家たちと交遊、「道閑会」の主要メンバー。芥川龍之介の主治医として最期をみとる。雅号・空谷(くうこく)。

むろう　さいせい
室生　犀星

明治22年(1889)～昭和37年(1962)
詩人・小説家

石川県 金沢市出身。生後まもなく養子に出され不遇の少年期を過ごす。高等小学校を中退し、金沢地方裁判所に給仕となった頃から文学に目覚め上京、貧困と放浪の作家生活に入る。大正5年、田端163(現3-4)番地に転入し、雑誌『感情』や詩集を刊行。その後同523(現5-5)番地等に転居、小説家として新境地を開く一方、堀辰雄や中野重治らの若手育成にも功績を残す。北区立田端中学校校歌の作詞も行った。俳号・魚眠洞。

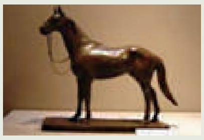
ひろせ　たけし
広瀬　雄

明治7年(1874)～昭和39年(1964)
教育者(府立第三中学校校長)

石川県 金沢市出身。大正3年、田端523(現5-5)番地に転入。芥川龍之介が府立第三中学校（現両国高校）在学中の5年間を受け持つ。芥川が信頼した恩師のひとり。同じく府立三中の教え子である堀辰雄を隣家の室生犀星に紹介。それが堀の文学界入りのきっかけとなる。

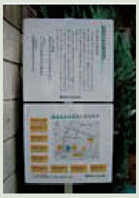
田端文士村記念館のあゆみ

主な出来事･事業年表

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 5（1993）年	開設（11. 4）／一般公開（11.5） オリジナルビデオ「田端文士芸術家村」制作 （開館時） 開館当時のパンフレット 講演する芥川瑠璃子氏 〈講演会〉 オープニング記念講演会 「おじの愛した町、田端、そして芥川龍之介」 芥川瑠璃子（11. 7）	クリントン米大統領就任（1.20） サッカー Jリーグ開幕（5.15） 皇太子・雅子さまご成婚（6.9） 北海道南西沖地震で大きな被害（7.12） 細川連立内閣がスタート（8.9）
平成 6（1994）年	オリジナルビデオ「芥川龍之介」制作 ビデオ「芥川龍之介」 〈講演会〉 「田端文士村の美術家と文人たち」 匠秀夫（3. 6） 「田端時代の室生犀星－その人と文学」 奥野健男（7. 3） 「詩の都田端　萩原朔太郎と中野重治－その詩精神 」 桶谷秀昭（9.11） 「芥川龍之介論　芥川における下町 」 吉本隆明（11. 6）	村山連立政権誕生（6.30） 日本人初の女性宇宙飛行士･向井千秋さん、宇宙へ（7. 8） 記録的猛暑、水不足が深刻化（8月） 大江健三郎氏にノーベル文学賞（10.13）
平成 7（1995）年	館報「田端文士村記念館だより」創刊 オリジナルビデオ「板谷波山」制作 「田端文士村記念館だより」 〈講演会〉 「田端文士村と久保田万太郎」 近藤富枝（3.19） 「田端文士村ゆかりの歌人たち －アララギ派を中心に」 岡井隆（7.23） 「田端の俳人たち」 金子兜太（11.12） ビデオ「板谷波山」	M 7.2の直下型地震による「阪神淡路大震災」発生（1.17） 「地下鉄サリン事件」で11人死亡（3.20） ロシアのサハリンで直下型大地震発生（5.28） 不良債権の影響で金融不安拡大（7月～）
平成 8（1996）年	田端ひととき散歩開始（4.20） 「池田勇八生誕110周年記念彫刻展」 開催（9.3 ～ 9.16） 田端ひととき散歩風景 〈講演会〉 「田端の大衆作家たち」 尾崎秀樹（3. 17） 「谷根千と田端」 森まゆみ（7.20） 「野口雨情・金の星社と田端」 宮崎芳彦（11.23）  池田勇八作 「トキノミノル号」	オウム松本被告初公判スタート（4.24） アトランタ五輪で日本勢メダル14個（7.19） 米・露大統領選挙でクリントン･エリツィン大統領が再選（11. 5） 病原性大腸菌「O157」による食中毒が全国各地で発生（5～9月）

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 9（1997）年	**〈講演会〉** 「軽井沢と田端」 内藤淳一郎（5.11） 「田端回顧」 中村真一郎（10.12）	中国の最高実力者、鄧小平氏が92歳で死去（2.19） 消費税5%スタート（4.1） 北海道拓殖銀行・山一証券など金融機関の破綻が相次ぐ（11.17） 宇宙飛行士・土井隆男さん、日本人初の船外活動（12. 5）
平成 10（1998）年	オリジナルビデオ「室生犀星」制作 ビデオ「室生犀星」 **〈講演会〉** 「朔太郎と犀星 」 大岡信（3.15） 「芥川龍之介と田端 」 平岡敏夫（11. 3） 「田端　犀星と朔太郎」 伊藤信吉（11. 8）	長野冬季五輪開催（2. 7） サッカーW杯仏大会に日本初出場（6月） 小渕内閣発足（7.30） 北朝鮮のミサイル「テポドン」が三陸沖に落下（8.31）
平成 11（1999）年	**〈講演会〉** 「香取秀真・正彦と田端文士芸術家村」 香取忠彦（3.22） 「短歌と伝統」 岡野弘彦（7.11） 「若き日の芥川龍之介」 中西進（12. 5）	EUで単一通貨「ユーロ」を導入（1. 1） 銀行の大型再編相次ぐ（3月～） 東海村で国内初の臨界事故発生（9.30） 自自公連立政権発足（10. 4）
平成 12（2000）年	**〈講演会〉** 「童謡詩人・野口雨情－そのことばと心」 金田一春彦（3.12） 「ハチローの多彩な70年」 佐藤四郎（6.11） 「思い出の文士たち－田端・鎌倉・馬込」 萩原葉子（10.29）	森連立内閣発足（4. 5） 三宅島噴火で全島民避難（6.27） シドニー五輪で女性選手大活躍（9·10月） 白川博士にノーベル化学賞（10.1） 米・露大統領選挙でブッシュ・プーチン氏が当選（12.13）
平成 13（2001）年	パンフレット全面改訂（9月） 全面改訂したパンフレット **〈講演会〉** 「室生犀星　その文学と美術」 田辺徹（3. 4） 「芥川龍之介の復活」 関口安義（6.12） 「画家小杉放庵－田端芸術家村のさきがけ」 田中正史（10.21）	小泉内閣発足（4.26） アメリカで同時多発テロ発生（9.11） その後米英がアフガン空爆（10.7） 野依博士にノーベル化学賞（10.10） 皇太子妃雅子さま女児出産（12. 1）

主な出来事·事業年表

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 14（2002）年	〈講演会〉 「室生犀星の横顔」 本多浩（3.10） 「板谷波山－その人と芸術 」 村田あき子、荒川正明（6.30） 「田端時代の平塚らいてう」 小林登美枝（11. 4）	サッカーW杯、初の日韓共催で日本ベスト16（5. 31 ～ 6. 30） 史上初の日朝首脳会談、拉致被害者 5 人帰国（9. 17） 小柴さん、田中さん、ノーベル賞ダブル受賞（10. 8） 中国共産党が胡錦濤総書記体制の新指導部選出（11. 14）
平成 15（2003）年	開館 10 周年記念事業開催（11. 1 ～ 11. 30） ・特別展（11. 1 ～ 11. 30） ・特別ひとときさ散歩（11. 9） ・映画「羅生門」上映（11. 15） ・閑座「羅生門」ほか上演（11. 22） ・研究員シンポジウム「田端文士村」（11. 24） 開館10周年特別展 〈講演会〉 「挿絵画家・岩田専太郎 」 堂昌一（3.16） 「田端における文士・芸術家の交流」 近藤富枝（11. 1）	米英軍とイラクが開戦（12. 14） 米軍がフセイン元大統領拘束（3. 20） 「千と千尋の神隠し」にアカデミー賞（3. 24） 10 年ぶり冷夏に列島冷え込む 衆院選で民主党が躍進、二大政党化進む（11. 9）
平成 16（2004）年	映画「HAZAN」上映会開催（10. 22 ～ 10. 24） 映画「HAZAN」上映会入場券 〈講演会〉 「大衆文学に見る田端文士芸術家」 縄田一男（3.21） 「芥川龍之介『地獄変』と菊池寛『藤十郎の恋』」 宮原昭夫（6. 20） 「野上弥生子の長編小説 」 加賀乙彦（11. 14）	北朝鮮の拉致被害者家族が帰国（5. 22・7. 18） アテネ五輪で日本選手活躍、史上最多のメダル獲得（8 月） 新潟県中越地方でＭ 6. 8 の地震発生（10. 23） スマトラ沖でＭ9. 0の大規模地震・津波発生（12. 26）
平成 17（2005）年	室生犀星旧居跡案内標示板設置（4 月）  室生旧居跡標示板 〈講演会〉 「田端一帯　美術と文学－室生犀星を中心に」 田辺徹（3.20） 「時代小説について」 平岩弓枝（5.29） 「芥川龍之介の文学－本所から田端へ 」 石割透（10. 6）	愛・地球博（愛知万博）開催、累計来場者数 2, 205 万人（3 ～ 9 月） 第 264 代ローマ法王ヨハネ・パウロ2世死去（4. 2） JR 福知山線脱線事故、死者 107 人（4. 25） マンションなど耐震強度偽装発覚（11 月）

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 18（2006）年	「大衆文芸作家池上信一展－同人誌と教師と趣味」 開催（10. 3 ～ 12.3） 文学散歩 「池上信一の住んだ田端・谷中を歩く」 実施 （11.23） 池上信一展ポスター 〈講演会〉 「『赤い鳥』の周辺－田端文士藝術家との関連から 」 千葉俊二（3. 5） 「田端ゆかりの美術家たち」 北澤憲昭（7.30） 「『小説会議』と遅い青春の仲間たち」 早乙女貢（10. 8）	トリノ冬季五輪で荒川静香が金メダル（2.23） ジャワ島地震で死者約 6000 人（5.27） 秋篠宮妃紀子さま男児出産（9. 6） 安倍内閣が発足（9.26）
平成 19（2007）年	板谷波山及び小杉放庵旧居跡案内標示板設置（2 月） 「彫刻家吉田三郎展－『パリーの女』を中心に」開催（10.11 ～ 11.18） 芥川龍之介没後80年企画展「芥川龍之介・多様なる生」開催（11.22 ～ 2.11） 「芥川龍之介シンポジウム」 芥川龍之介没後80年企画展ポスター 〈講演会〉 「平塚らいてうの軌跡－『青鞜』から新婦人協会まで 」 岩淵宏子（3.20） 「堀辰雄の東京時代 －堀辰雄〈不器用な天使〉のころ」 池内輝雄（5.20） 「交遊する芸術家たち－竹久夢二、山本鼎、小杉放庵、鏑木清方、北原白秋」 山田俊幸（10.14） 「芥川龍之介と私－『六の宮の姫君』を中心に 」 北村薫（12.16） 「芥川龍之介シンポジウム—田端から世界へ 」 関口安義、松本常彦、庄司達也、嶌田明子（12.22）	食品偽装が相次ぎ社会問題となる（1 月～） 「年金記録漏れ」5000万件判明（4. 3） 参院選で自民惨敗、民主第1党に、与党は過半数割れ（7.29） 安倍首相が突然の退陣、後継に福田首相（9.12） ニューヨーク原油、史上最高値を記録（11.20）
平成 20（2008）年	開館15周年記念展 「写真と資料が語る文士村記念館15年の歩み」 （7.24 ～ 9. 7） 開館15周年特別展「企画展　村上元三展」（10.16 ～ 12.10） 朗読会「村上元三『佐々木小次郎』ほか」吉澤閑（風羅坊遊行）（11. 3） 「村上元三原作映画ビデオ上映会」（11. 3） 散策会「田端・馬込文士村散歩～都内二大文士村を巡る～」（11. 9） パネルディスカッション「大衆文学と田端」（11.15） 朗読する吉澤閑氏 開館15周年特別展 開館15周年特別展ポスター 〈講演会〉 開館 15 周年記念講演会 「岡倉天心と東京美術学校」 小泉晋弥（8. 3） 村上元三展記念講演会 「文章から考える人生」 藤本義一（11. 5）	M 8.0の中国「四川地震」発生（5.12） 北京オリンピック開催（8. 8 ～ 8.24） 戦後最長の景気拡大に終止符（8 月） リーマン・ショックをきっかけに金融危機（9 月） 日本人4人にノーベル賞（10月）

主な出来事･事業年表

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 21（2009）年	「子ども豆本作りと朗読会」(8. 22) 室生犀星生誕 120 年企画展「室生犀星と田端文士芸術家村」開催 (10. 1 ～ 11. 23) ビデオ上映とトークのつどい「室生犀星の人と足跡」(11. 3) 散策会「田端・馬込文士村散歩～都内二大文士村を巡る～」(11. 15) 子ども豆本作りと朗読会 子ども豆本作りと朗読会ポスター 室生犀星生誕120年企画展 〈講演会〉 「子規とその時代 」粟津則雄 (2.15) 「小説の中のヒロインたち」宮原昭夫 (6. 28)	政権交代、民主党鳩山政権誕生 (9. 16) 日本が WBC 連覇 (3. 23) 「裁判員制度」スタート (5. 21) イチロー選手が大リーグ史上初の9年連続 200 安打 (9. 14) ノーベル平和賞にオバマ大統領 (12. 10)
平成 22（2010）年	芥川龍之介旧居跡案内標示板設置 (3 月) 「子ども和装豆本づくり」(8. 22) 村上元三生誕 100 年記念企画展「村上元三と田端の大衆文学作家たち」(10. 8 ～ 12. 19) 田端中学校オープンスクールでの講座開講 (11月、3 回) 芥川旧居跡標示板 田端中オープンスクール 村上元三生誕100 年記念企画展ポスター 〈講演会〉 「『坂の上の雲』と子規」関川夏央 (3.7) 「子規をとりまく人々 ―叔父加藤拓川、妹律、養子忠三郎など―」正岡明 (6. 13) 村上元三生誕100 年記念講演会 「村上元三先生の思い出」 平岩弓枝 (10. 31)	ハイチでＭ 7. 0 地震、23 万人死亡 (1. 12) 上海万博開催 (5. 1 ～ 10. 31) 小惑星探査機「はやぶさ」帰還 (6. 13) ノーベル化学賞に根岸氏、鈴木氏 (10. 6) チリ鉱山落盤事故、33 人「奇跡の救出」(10. 13)
平成 23（2011）年	首都大学東京オープンユニバーシティ講座での講座開講 (4 ～ 6 月、3 回) 「子ども和装豆本づくり」(8. 7) 小杉放庵生誕 130 年記念企画展 「画家小杉放庵と田端の輩たち」(10. 7 ～ 11. 27) 滝野川第一小学校「文士村コンベンション　伝えよう！田端文士村～伝わる・伝える～」開催 (11. 18) 田端中学校オープンスクールでの講座開講 (11 ～ 12 月、3 回) サトウハチロー旧居跡案内標示板設置 (11 月) 首都大学東京 オープンユニバーシティ講座 滝野川第一小学校 文士村コンベンション 小杉放庵生誕130 年記念企画展ポスター 〈講演会〉 「新聞小説挿絵と石井鶴三・岩田専太郎」大貫伸樹 (3. 6) 「芥川龍之介とジュール・ルナール」奥本大三郎 (6.5) 小杉放庵生誕130 年記念講演会 「ぼくの西遊記」夢枕獏 (11. 20)	東日本大震災、原発事故で甚大被害 (3 月) 原発停止相次ぎ、電力不足が深刻化 なでしこジャパン、サッカー W 杯優勝 (7. 17) タイで大洪水、日本企業にも被害 (7 月) 世界人口が 70億人に (10. 31)

年	当館のイベント等	この年の主な出来事
平成 24（2012）年	子ども文学講座「アニメで学ぼう芥川龍之介」（8.5） 板谷波山生誕140年記念企画展「板谷波山と田端の芸術家たち」（11.2 ～ 12.15） 馬込文士村パネル展開催（11.3 ～ 11.14） 田端中学校オープンスクールでの講座開講（11月、3 回） 芥川龍之介生誕120年シンポジウム 芥川龍之介生誕120年シンポジウムポスター 板谷波山生誕140年記念企画展ポスター 馬込文士村パネル展ポスター 子ども文学講座 **〈講演会〉** 芥川龍之介生誕120年没後85年講演会・シンポジウム 「芥川龍之介の素顔」 関口安義（3.10） 「芥川龍之介文学を育てた両国」 行吉正一（6.3） 室生犀星没後50年記念講演会 「家庭の中の祖父犀星」 室生洲々子（10.14） 板谷波山生誕140年記念講演会 「板谷波山の陶芸と田端窯」 荒川正明（12.2）	ノーベル生理学・医学賞に山中教授（12.10） 東京スカイツリー開業（5.22） ロンドン五輪、史上最多のメダル38個（7.27 － 8.12） 英エリザベス女王の即位60年で祝賀行事（6.2） 金環日食、932年ぶり広範囲観測（5.21） NASA 無人探査車が火星に着陸（8.6）
平成 25（2013）年	東京区政会館「北区の文化施設魅力紹介展」出展（2.5 ～ 2.28） 板谷波山没後50年記念映画「波山をたどる旅」特別試写会（7.7） 「アニメとミニ散歩で学ぼう！芥川龍之介」（8.4） 荒川区民カレッジ「田端文士村を識る」開講 全6回（9.5 ～ 11.21） 「モザイク作家・板谷梅樹没後50年記念作品展」（9.19 ～ 10.20） 「田端文士村を語る会」（9.23） 開館20周年記念展「文士村博覧会」（10.25 ～ 12.1） 開館20周年記念誌発行（11.4） 田端中学校オープンスクールでの講座開講（11月、3 回） 北区の文化施設魅力紹介展 北区の文化施設魅力紹介展パンフレット 映画「波山をたどる旅」試写会ポスター 板谷梅樹没後50年記念作品展ポスター **〈講演会〉** 開館20周年記念講演会 「文学散歩と世界」 荒川洋治（6.2） 開館20周年記念講演会 「大正文学の幻想性ー芥川龍之介、佐藤春夫を中心にー」 川本三郎（10.26）	元横綱大鵬国民栄誉賞受賞（2.25） 長嶋茂雄・松井秀喜国民栄誉賞受賞（5.5） 出雲大社で「本殿遷座祭」60年ぶりの遷宮（5.10） スカイツリーからの本放送開始（5.31） 世界遺産に富士山登録（6.22） 2020年夏季オリンピック東京開催決定（9.7） 伊勢神宮式年遷宮（10.2）

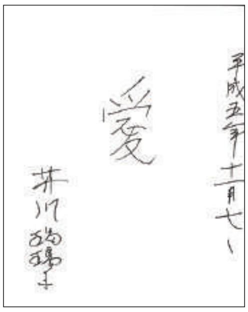
田端文士村記念館の講演会をふりかえって

田端文士村記念館

平成5年11月7日

田端文士村記念館オープニング記念講演会 おじの愛した町、田端、そして芥川龍之介

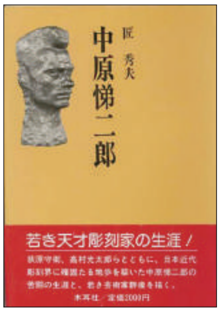
芥川　瑠璃子氏
(あくたがわ・るりこ 1916-2007)
随筆家、芥川龍之介の姪で龍之介長男・比呂志の妻



平成6年3月6日

田端文士村の美術家と文人たち

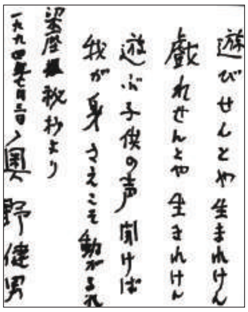
匠　秀夫氏
(たくみ・ひでお 1924-1994)
美術評論家　『中原悌二郎』



平成6年7月3日

田端時代の室生犀星 ― その人と文学

奥野　健男氏
(おくの・たけお 1926-1997)
文芸評論家　『三島由紀夫伝説』



平成6年9月11日

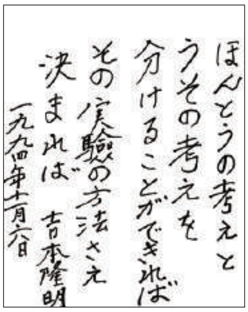
詩の都田端　萩原朔太郎と中野重治
― その詩精神

桶谷　秀昭氏
（おけたに・ひであき 1932- ）
文芸評論家　『昭和精神史』

平成6年11月6日

芥川龍之介論　芥川における下町

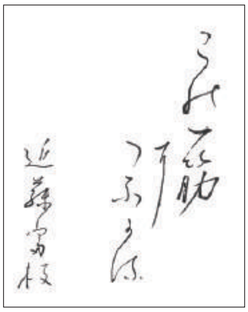
吉本　隆明氏
（よしもと・たかあき 1924-2012）
思想家、詩人、文芸批評家　『共同幻想論』



平成7年3月19日

田端文士村と久保田万太郎

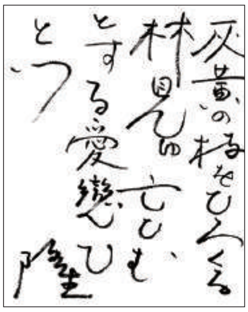
近藤　富枝氏
（こんどう・とみえ 1922- ）
作家　『田端文士村』



平成7年7月23日

田端文士村ゆかりの歌人たち
― アララギ派を中心に

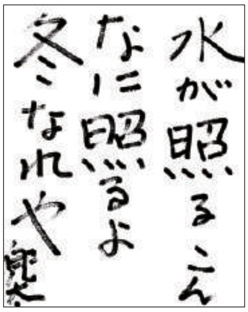
岡井　隆氏
（おかい・たかし 1928- ）
歌人、文芸評論家　『岡井隆全歌集』



平成7年11月12日

田端の俳人たち

金子　兜太氏
（かねこ・とうた 1919- ）
俳人　『金子兜太集』



平成8年3月17日

田端の大衆作家たち

尾崎　秀樹氏

（おざき・ほつき 1928-1999）

文芸評論家　『大衆文学の歴史』

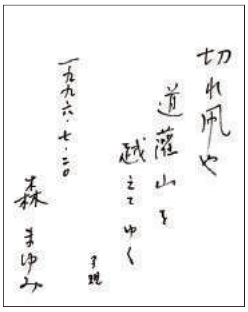
平成8年7月20日

谷根千と田端

森　まゆみ氏

（もり・まゆみ 1954-　）

作家、エッセイスト　『鴎外の坂』



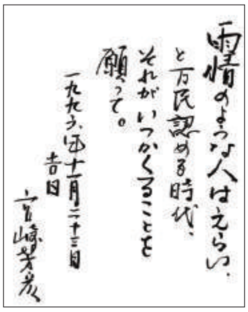
平成8年11月23日

野口雨情・金の星社と田端

宮崎　芳彦氏

（みやざき・よしひこ 1941-2009）

文芸評論家　『斎藤佐次郎・児童文学史』編



平成9年5月11日

軽井沢と田端

内藤　淳一郎氏

（ないとう・じゅんいちろう 1923-2000）

当館初代館長、女子聖学院高等学校校長・同短期大学教授等を歴任

「田端に在住した芸術家　芥川龍之介」他論文多数

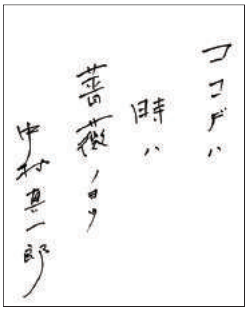
平成9年10月12日

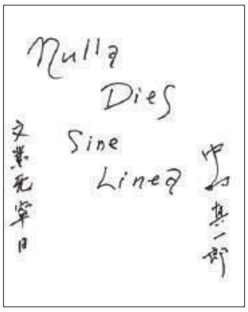
田端回顧

中村　真一郎氏

（なかむら・しんいちろう 1918-1997）

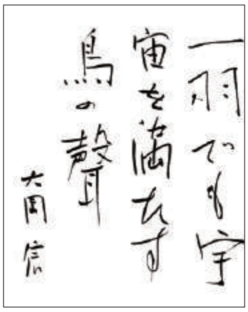
作家　『四季』四部作





平成10年3月15日

朔太郎と犀星



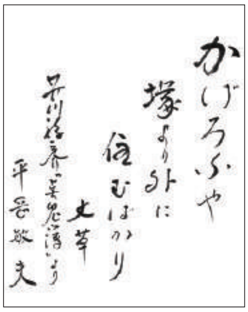
大岡　信氏

（おおおか・まこと 1931- ）

詩人　『折々のうた』

平成10年11月3日

芥川龍之介と田端



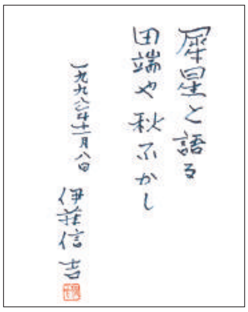
平岡　敏夫氏

（ひらおか・としお 1930- ）

日本近代文学研究者　『日露戦後文学の研究』

平成10年11月8日

田端　犀星と朔太郎



伊藤　信吉氏

（いとう・しんきち 1906-2002）

詩人　『逆流の中の歌』

平成11年3月22日

香取秀真・正彦と田端文士芸術家村

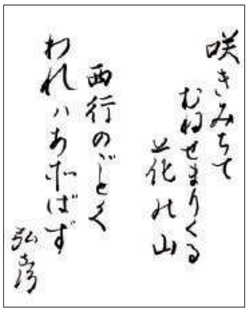
香取　忠彦氏

（かとり・ただひこ 1930- ）

金工史研究者、香取正彦（鋳金家）の長男　『奈良の大仏』

平成11年7月11日

短歌と伝統



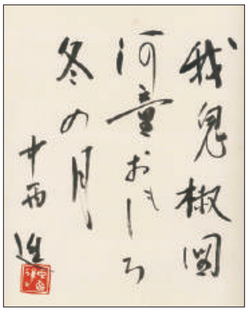
岡野　弘彦氏

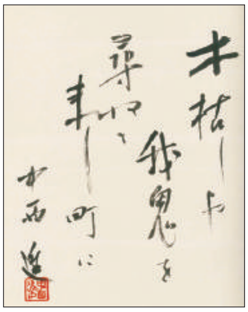
（おかの・ひろひこ 1924- ）

歌人　『天の鶴群』

平成11年12月5日

若き日の芥川龍之介





中西　進氏
（なかにし・すすむ 1929- ）
日本古代文学研究者　『万葉集の比較文学的研究』

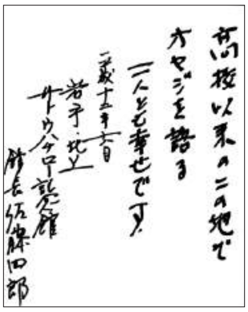
平成12年3月12日

童謡詩人・野口雨情
― そのことばと心

金田一　春彦氏
（きんだいち・はるひこ 1913-2004）
言語学者、国語学者　『日本語』

平成12年6月11日

ハチローの多彩な70年



佐藤　四郎氏
（さとう・しろう 1937- ）
サトウハチロー記念館館長、サトウハチロー（詩人）の次男

平成12年10月29日

思い出の文士たち
― 田端・鎌倉・馬込

萩原　葉子氏
（はぎわら・ようこ 1920-2005）
萩原朔太郎の長女、作家　『蕁麻の家』

平成13年3月4日

室生犀星　その文学と美術

田辺　徹氏
（たなべ・とおる 1925- ）
美術史家　『回想の室生犀星』

平成13年6月12日

芥川龍之介の復活

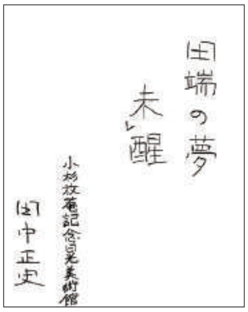
関口　安義氏

（せきぐち・やすよし 1935- ）

日本近代文学研究者　『芥川龍之介とその時代』

平成13年10月21日

画家小杉放庵
— 田端芸術家村のさきがけ



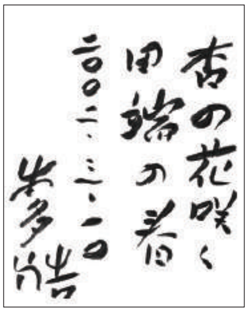
田中　正史氏

（たなか・まさふみ 1967- ）

小杉放菴記念日光美術館学芸主任

平成14年3月10日

室生犀星の横顔



本多　浩氏

（ほんだ・ひろし 1932- ）

日本近代文学研究者　『室生犀星伝』

平成14年6月30日

板谷波山
— その人と芸術

村田　あき子氏

（むらた・あきこ 1932- ）

板谷波山令孫

荒川　正明氏

（あらかわ・まさあき 1961- ）

出光美術館主任学芸員（現学習院大学教授）

『板谷波山の生涯』

平成14年11月4日

田端時代の平塚らいてう

小林　登美枝氏

（こばやし・とみえ 1916-2004）

女性史研究家　「平塚らいてうの会」会長

『平塚らいてう　愛と反逆の青春』

平成15年3月16日

挿絵画家・岩田専太郎

堂　昌一氏

（どう・しょういち 1926-2011）

挿絵画家

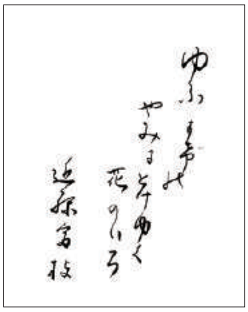
平成15年11月1日

田端における文士・芸術家の交流

近藤　富枝氏

（こんどう・とみえ 1922- ）

作家　『田端文士村』



平成16年3月21日

大衆文学に見る田端文士芸術家
― 川口松太郎・岩田専太郎を中心に

縄田　一男氏

（なわた・かずお 1958- ）

文芸評論家　『時代小説の読みどころ』

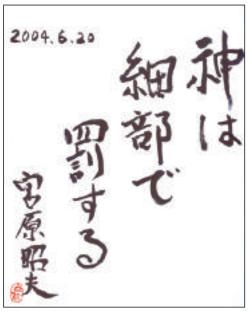
平成16年6月20日

芥川龍之介『地獄変』と
菊池寛『藤十郎の恋』

宮原　昭夫氏

（みやはら・あきお 1932- ）

作家　『誰かが触った』



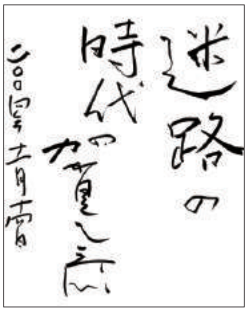
平成16年11月14日

野上弥生子の長編小説

加賀　乙彦氏

（かが・おとひこ 1929- ）

作家、精神科医　『宣告』



平成17年3月20日

田端一帯　美術と文学
― 室生犀星を中心に

田辺　徹氏

（たなべ・とおる 1925- ）

美術史家　『回想の室生犀星』

平成17年5月29日

時代小説について

平岩　弓枝氏

（ひらいわ・ゆみえ 1932- ）

作家、脚本家　『御宿かわせみ』シリーズ

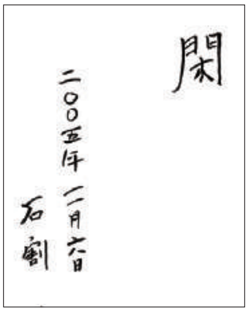
平成17年10月6日

芥川龍之介の文学
― 本所から田端へ

石割　透氏

（いしわり・とおる 1945- ）

日本近代文学研究者　『「芥川」とよばれた藝術家』



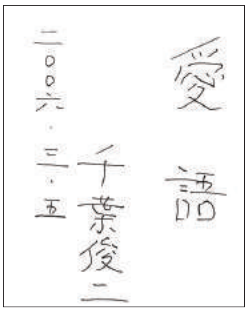
平成18年3月5日

『赤い鳥』の周辺
― 田端文士藝術家との関連から

千葉　俊二氏

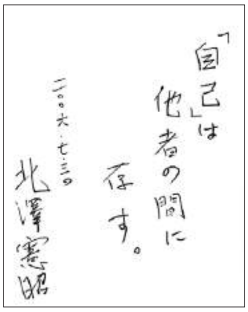
（ちば・しゅんじ 1932- ）

日本近代文学研究者　『谷崎潤一郎　狐とマゾイズム』



平成18年7月30日

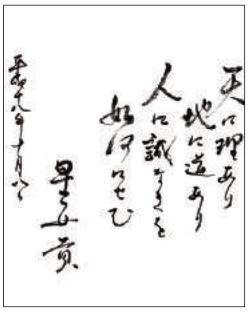
田端ゆかりの美術家たち



北澤　憲昭氏
（きたざわ・のりあき 1951- ）
美術史家、美術評論家　『眼の神殿　「美術」受容史ノート』

平成18年10月8日

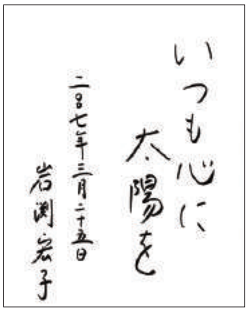
『小説会議』と遅い青春の仲間たち



早乙女　貢氏
（さおとめ・みつぐ 1926-2008）
作家　『會津士魂』

平成19年3月20日

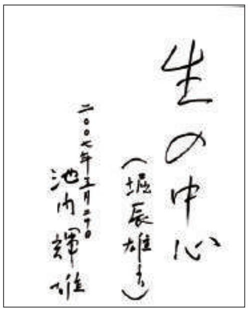
平塚らいてうの軌跡
―『青鞜』から新婦人協会まで



岩淵　宏子氏
（いわぶち・ひろこ 1945- ）
女性文学研究者　『宮本百合子　家族、政治、そしてフェミニズム』

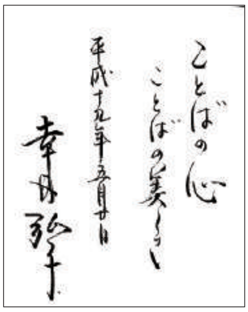
平成19年5月20日

堀辰雄の東京時代
―『不器用な天使』のころ



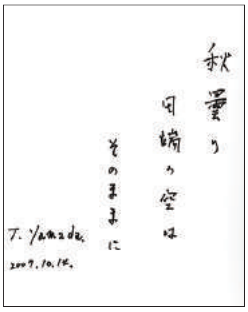
講演：**池内　輝雄**氏
（いけうち・てるお 1938- ）
日本近代文学研究者　『志賀直哉の領域』

朗読：「曠野（あらの）」**幸田　弘子**氏
（こうだ・ひろこ）
女優



平成19年10月14日

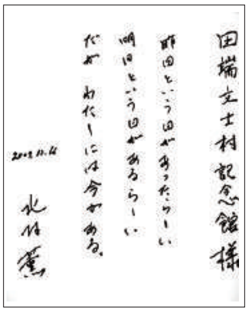
交遊する芸術家たち
― 竹久夢二、山本鼎、小杉放庵、鏑木清方、北原白秋



山田　俊幸氏
（やまだ・としゆき 1947- ）
日本近代文学研究者　『アンティーク絵はがきの誘惑』

平成19年12月16日

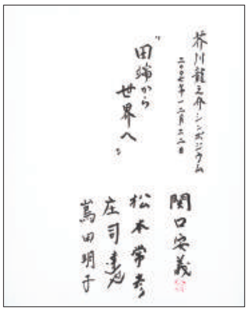
芥川龍之介と私
―『六の宮の姫君』を中心に



北村　薫氏
（きたむら・かおる 1949- ）
作家　『ニッポン硬貨の謎』

平成19年12月22日

芥川龍之介シンポジウム
― 田端から世界へ



関口　安義氏
（せきぐち・やすよし1935- ）
『芥川龍之介とその時代』

松本　常彦氏
（まつもと・つねひこ 1959- ）
『交錯する軌跡：注釈昭和の短篇小説』（共著

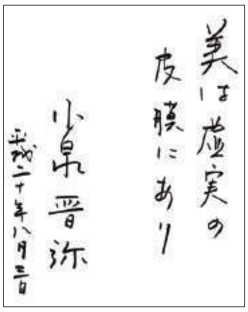
嶌田　明子氏
（しまだ・あきこ 1962- ）
「芥川龍之介『報恩記』」（論文）

庄司　達也氏
（しょうじ・たつや 1961- ）
『芥川龍之介全作品事典』共編著

※いずれも日本近代文学研究者

平成20年8月3日

田端文士村記念館開館15周年記念講演会
岡倉天心と東京美術学校



小泉　晋弥氏
（こいずみ・しんや 1953- ）
美術史家　『岡倉天心と五浦』（共編）

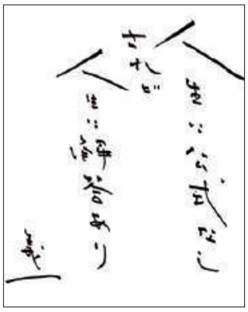
平成20年11月5日

村上元三展記念講演会
文章から考える人生

藤本　義一氏

（ふじもと・ぎいち 1933-2012）

作家　『鬼の詩』（直木賞受賞）



平成21年2月15日

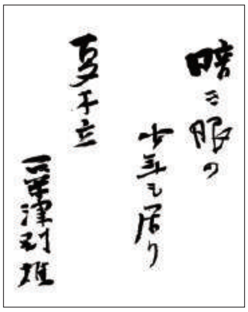
子規とその時代

粟津　則雄氏

（あわづ・のりお 1927- ）

文芸・美術評論家、草野心平記念文学館館長

『粟津則雄著作集』全7巻、『正岡子規』



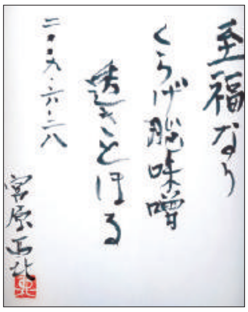
平成21年6月28日

小説の中のヒロインたち

宮原　昭夫氏

（みやはら・あきお 1932- ）

作家　『誰かが触った』



平成22年3月7日

「坂の上の雲」と子規

関川　夏央氏

（せきかわ・なつお 1949- ）

文芸評論家　『「坂の上の雲」と日本人』、『昭和が明るかった頃』

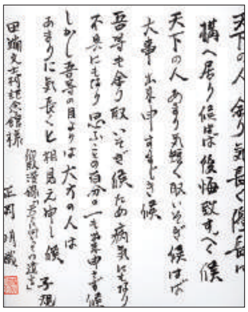
平成22年6月13日

子規をとりまく人々
―叔父加藤拓川、妹律、養子忠三郎など―

正岡　明氏

（まさおか・あきら 1945- ）

正岡子規研究所主宰



平成22年10月31日

村上元三生誕100年記念講演会
村上元三先生の思い出

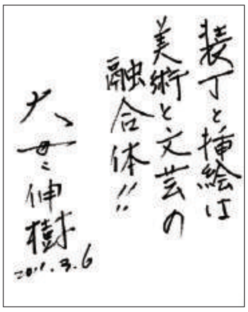
平岩　弓枝氏

（ひらいわ・ゆみえ 1932- ）

作家、脚本家　『御宿かわせみ』シリーズ

平成23年3月6日

新聞小説挿絵と石井鶴三・岩田専太郎 ～初めての挿絵団体『挿絵倶楽部』と春陽会の仲間たち～



大貫　伸樹氏

（おおぬき・しんじゅ 1949- ）

装丁家、装丁史家　『装丁探索』、『製本探索』

平成23年6月5日

芥川龍之介とジュール・ルナール

奥本　大三郎氏

（おくもと・だいさぶろう 1944- ）

フランス文学者、作家、随筆家

『完訳ファーブル昆虫記』、『虫の宇宙誌』

平成23年11月20日

小杉放庵生誕130年記念講演会
ぼくの西遊記

夢枕　獏氏

（ゆめまくら・ばく 1951- ）

作家　『餓狼伝』、『陰陽師』

平成24年3月10日

生誕120年没後85年記念講演会 芥川龍之介の素顔
シンポジウム 芥川文学の可能性

講演：**関口　安義**氏

（せきぐち・やすよし 1935- ）

日本近代文学研究者

『芥川龍之介とその時代』

朗読：「蜘蛛の糸」**篠崎　美生子**氏

（しのざき・みおこ）

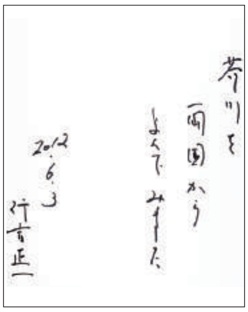
恵泉女学園大学准教授

シンポジウム：**芥川龍之介研究年誌の会**

平成24年6月3日

芥川龍之介生誕120年記念講演会
芥川龍之介文学を育てた両国

行吉　正一氏
（ゆきよし・しょういち 1959- ）
東京都江戸東京博物館学芸員

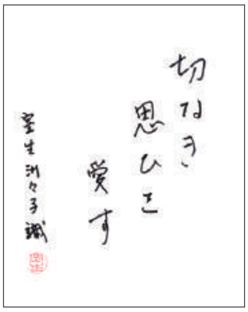


平成 24年10月14日

室生犀星没後50年記念講演会
家庭の中の祖父犀星

講演：**室生　洲々子**氏
（むろう・すずこ 1961- ）
室生犀星令孫、室生犀星記念館名誉館長

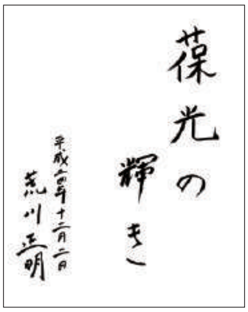
朗読：「小景異情」他 **船越　ミユキ**氏
（ふなこし・みゆき）
★☆北区AKT　STAGE専属俳優



平成25年12月2日

板谷波山生誕140年記念講演会
板谷波山の陶芸と田端窯
－2011年度田端窯発掘調査の成果を踏まえて－

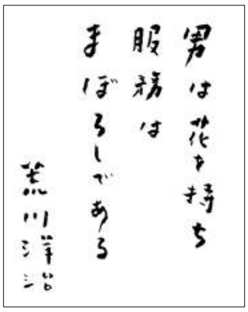
荒川　正明氏
（あらかわ・まさあき 1961- ）
学習院大学教授　『板谷波山の生涯』



平成25年6月2日

田端文士村記念館開館20周年記念講演会
文学散歩と世界

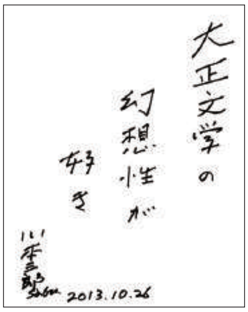
荒川　洋治氏
（あらかわ・ようじ 1949- ）
現代詩作家　『渡世』、『忘れられる過去』



平成25年10月26日

田端文士村記念館開館20周年記念講演会
大正文学の幻想性
－芥川龍之介、佐藤春夫を中心に－

川本　三郎氏
（かわもと・さぶろう 1944- ）
文芸評論家　『大正幻影』、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』



地域との交流①　北区立滝野川第一小学校「田端文士村新聞」「田端文士村コンベンション」

田端文士村記念館は、北区立滝野川第一小学校（北区田端5-4-1）の見学や調べ学習のサポート、発表会開催の際の協力などを行っています。

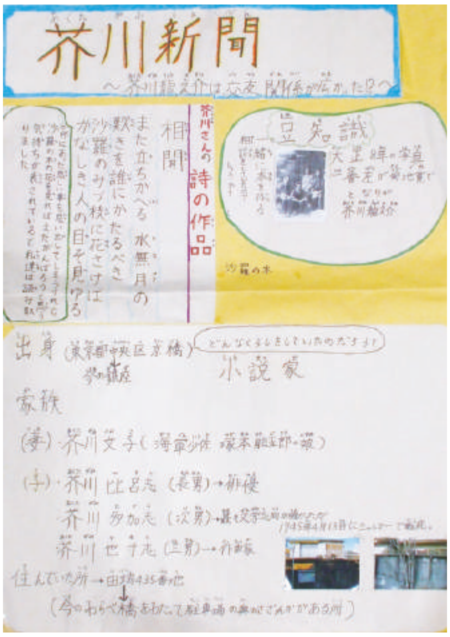
滝野川第一小学校では5年生の総合的な学習の時間の中で、自分たちがキャスターとなって文士村を紹介する「ビデオニュース」の制作、グループごとに調べた文士芸術家について発表する「田端文士村コンベンション」、夏休みに調べ学習をしてまとめた「田端文士村新聞」作りなど、調べたことを様々に工夫して下級生や地域の人々に伝えるという取り組みを行ってきました。

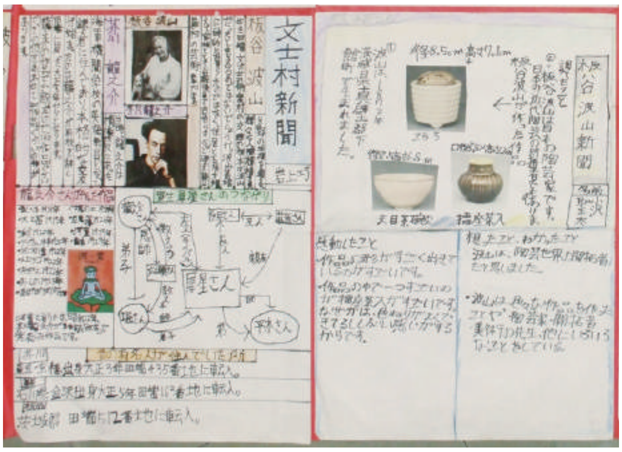
その中から、「田端文士村新聞」と「田端文士村コンベンション」をご紹介します。

① 田端文士村新聞

滝野川第一小学校5年生が、それぞれ夏休みに田端文士村について調べたことを新聞にまとめ、学校や田端文士村記念館で展示を行いました。作成した新聞の一部や、記念館で展示した時の様子などをご紹介します。

田端文士村記念館での展示風景（平成22年度5年生）





田端文士村記念館での展示風景（平成23年度5年生）

② 田端文士村コンベンション

平成23年11月18日（金）、田端文士村記念館ホールにて、滝野川第一小学校5年生による「田端文士村コンベンション」が開催されました。芥川龍之介、板谷波山、小杉放庵、室生犀星、野口雨情、池田勇八、田河水泡、平塚らいてう、鹿島龍蔵のそれぞれ9グループに分かれて、保護者や地域の方々に発表を行いました。

芥川龍之介を調べたグループは、「蜘蛛の糸」、「杜子春」の朗読を行い、板谷波山を調べたグループは、演劇形式で板谷家の生活の様子を再現したり、「夫婦窯」や「飛鳥山焼」の紹介を行うなど、それぞれに工夫を凝らした内容で会場を楽しませせました。

児童の皆さんのご感想から

- 文士村コンベンションを成功させるまでにはたくさんの苦労がありました。でも、その苦労の分だけ成功した時はとても嬉しかったです。

- 今まで頑張ってきたことがあっという間に終わってしまった。夏休み前から待っていた文士村コンベンション、緊張したりしたけど、伝えたいことが伝わったと思う。

- 僕は今まででこの発表が一番良かったと思います。アドバイスされた所もちゃんと直してできていたし、声もちゃんと出ていたし最後までできたので、ものすごく達成感があって、やって良かったと思いました。

- 発表の時はいっぱい人がいたのですごく緊張してしまってセリフが間違いそうだったけど、最後までできたので良かったです。

- コンベンションに向けて調べていた時は、まだ後だなーと思っていたけど、ふり返るとあっというだった。本番は大成功。僕はお家の人の応援とみんなのアドバイスが一番心強かった。

- コンベンションまでは長かったけれど、終わってから考えると短かったように思いました。伝えている時は、ちゃんと伝わっているか心配だったけれど、うなずいてくれたり、しっかり目を見てくれたので、安心して伝えられました。

- やっと文士村コンベンションが終わりました。思ったよりたくさんの方々がいらして下さいました。前のグループの拍手を聞いてビックリしたけど、ほぼ間違えず、落ち着いてできました。ホッとしました。

- お客さんもうなずいていたので、とてもうれしかったです。今日の発表で、お客さんに田端をほこりに思っていただけたらうれしいです。

- 来て下さった方にも、色々な文士達のことが伝わったと思います。

田端文士村コンベンションの様子（平成23年11月18日）

「滝一小の田端文士村学習」

北区立滝野川第一小学校　主任教諭　　清水　千種

田端文士村記念館が開館20周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

文士村記念館の皆様には、毎年、本校5年生が地域学習の一環として行う「文士村学習」にご尽力いただいておりますことに、心から御礼申し上げます。

この度、20周年記念誌発行にあたり、本校の「文士村学習」をご紹介するよう承りました。

「田端文士村記念館」は滝一小の学区域にあり、3年生の「地域巡り」、4年生の「田端の今と昔」、そして、5年生での「田端文士村学習」へと系統的に地域学習を行う上で、かけがえのない存在としてお世話になってまいりました。

振り返りますと、滝一小の「文士村学習」が本格化しましたのは、「ビデオニュース制作」を文士村記念館の皆様にご支援いただいた4年前からということになります。

「板谷波山」のご家族の苦労の再現シーンを演じるために作った「夫婦窯」のミニチュア。「芥川龍之介」の写真から受ける印象は一見怖そうだけれど、作品「白」を通して、実際には思いやりの深い人だったと気付き捉えた子どもたちの視点。「調べたことが正しい情報なのか」、子どもたちは何度、文士村記念館に足を運んだことでしょう。多くの資料をいただいたり、時には、職員の方に調べものをさせてしまったり、ご迷惑もおかけしました。室生犀星の名前の由来を説明したビデオニュースには、文士村記念館の学芸員さんが出演してくださいました。

また、2年前に行った、記念館ホールを会場にしての「文士村コンベンション」では、保護者や地域の方々、大人ばかり130人を前に「芥川龍之介が滝一小の学芸会を見に来ていた」ことなど、文士たちのエピソードを調べ、伝えました。会場の皆さんからいただいた感想に、子どもたちは大きな達成感を得ることができました。

文士村学習の中で、子どもたちが口にするのは、「文士村ってすごい！」そして、「自分たちは、その田端に住んでいるんだ！」という言葉です。田端文士村を学んだ子どもたちには、「自分の住む地域への愛情」がはっきりと生まれています。

終わりに、これまでのご支援・ご協力に厚く御礼申し上げるとともに、今後とも、「田端文士村記念館」が、子どもたちの「地域の良さに気付く扉」であり続けていただけるようお願い申し上げます。

～コンベンションを観覧された方々の感想より～

- とても分かりやすくすばらしい発表で感激した。文士のことを知り、伝え続けることがとても大切だと思う。とても楽しかった。
- 一度、家族全員でゆっくり文士村を見たいと思った。
- 地域の歴史についてテーマをもって調べることのすばらしさに感動しました。
- 大好きだったのらくろの話もよく分かり、楽しかったです。
- これからも誇りを持って田端で生活してください。
- 田端に住んでいながら知らなかったので、勉強になりました。
- 地域への愛情と誇りを感じました。
- 田端文士村、滝一小に学ぶ子供たちの劇の素晴らしさにただただ感動。こちらがすっかり教えられた感じです。
- 今日だけでなく、田端に住んでいるたくさんの人たちに、この発表を聞いてほしいと思いました。
- 子供たちが田端を大好きになったことや、これからますます愛していってくれるだろうことを喜ばしく思います。

田端文士村コンベンションチラシ
（平成23年11月18日）

地域との交流② 北区立田端中学校「田端学びの郷・オープンスクール」

田端文士村記念館は、北区立田端中学校（北区田端6-9-1）の「田端学びの郷・オープンスクール」で、毎年「文士村研究」講座（全３回。概論・散策・文士芸術家紹介など）を担当しています。このオープンスクールは平成22年度から11月を実施時期として開講しており、中学生だけでなく、地域の小学生や住民の皆さんが、世代を超えた“学びの交流”をすることを目的としています。

受講された皆さんのご感想から

田端文士村記念館には何回か行ったことがあるけれど、説明してから訪れると誰がどう作ったのかがよくわかり良かったです。（中2）

僕は文士が昔住んでいた所には、実際に行ったことがなかったので、こんなに近くにあったとは思いませんでした。その意味では、自分たちが、この文士村を守らなくてはならないと思いました。（中2）

この学習を通して学んだこと、それは『この田端はとても歴史ある町だ』ということ。それを深く学びました。（小6）

初めに文士村の印象は『偉人達がたくさん住んでいた』…ということでしたが、実際3回の講座を受けると、この田端地区にいた文士さんたちは、もっと身近な存在であるということに気付きました。（中2）

最近道路建設のために旧文士村地区に工事が入ったと聞いて、もっとよく見ておくべきだったと思っています。町が変わってしまうのは悲しいことですね。（中3）

知るという事はとても面白い事です。色々な事を知ると、色々な考えもでてくると思います。当時の事を知ると、当時の文士達の心情も見えてくる気がします。芥川龍之介、室生犀星が親友だったことを知った時に、きっとこの二人の会話も弾んでいたのだろうと想像することができました。（中2）

第三回は田端の有名な所を歩きました。…いつもとはちがう道を通ってみると文士パワーを感じました。（小6）

僕は最近、学校に行く前に赤紙仁王様に通っていて、お参りしてから学校にいっています。僕はそのたびに「文士村研究」で学んだことを思い出します。（小6）

今後も、文士村の芸術家について調べてみたいと思います。文士村の芸術家達が住んでいた面影が開発によってなくなるのは残念だと思いました。（中1）

これからは、もっと地域の人やファミリーの学校との交流を深めていき、文士村のことを大勢の人に伝えていきたいと思いました。（小6）

室生犀星、菊池寛の家は、今はマンションでしたが、いつも通っていた道だったので驚きでした。今は拡張工事で景色が変わってしまった赤紙仁王の通りでは、ポプラ坂が残っていることを知り、「歴史的なものが残っているんだ」と、嬉しく思いました。（中2）

特に気に入ったのは、先生が資料で紹介した、芥川の「東京田端」です。初めて読んだのですが、文の1つ1つがとても綺麗で落ちつくような安心感のあるものでした。とても良かったので、これをきっかけに芥川の様々なジャンルの本を読んでみたいと思います。（中2）

研究員今昔

人と記録 ― 小杉放庵とその日記について ―

田端文士村記念館研究員
永井　康友

1．多才・異才

画家小杉放庵(のち放菴、未醒は初期の号。1881-1964)は、田端文士村の草分けとして明治33年から田端に住みはじめ、太平洋戦争中に疎開のため田端を去るまで、美術仲間だけでなく、芥川龍之介ら田端文士ともジャンルを超えて交流しました。その画業においては、大正初めにヨーロッパへ留学したあと洋画から日本画に転じ、近代的南画ともいえる画風で独自の境地を切り開きました。美術団体「春陽会」の創立メンバーとして、長きにわたって数々の名品を残しています。

本業のかたわら、漢籍を座右に置いて中国思想や詩文を探求するとともに、短歌や書に親しみ、随筆に腕をふるいました。その成果は、多数の著書の中で知ることができます。↗一方、30歳を過ぎてから習いはじめ大会で優勝するほどになったテニスのほか、野球、スキー、剣術、登山などのスポーツを愛好する文武両道の人でもありました。

田端の東覚寺門前にある2メートル近い赤紙仁王像を、酔った勢いでひっくり返した逸話を持つ放庵は、 その愛すべき人柄から、横山大観(1868-1958)、国木田独歩(1871-1908)、田山花袋(1872-1930)、芥川龍之介(1892-1927)ら時代を代表する人物たちと交誼を結びました。放庵に連なる人脈は、下図のとおり華麗を極めます。

こうした人的ネットワークは、豪放磊落(らいらく)であるとともに、「見かけよりも、遥に細い神経のある、優しい人」(注1)だった放庵が、「明治から大正にかけて一個の魅力ある多彩なメディアであった」(注2)ことを雄弁に物語っているかのようです。

＜小杉放庵と交流した人々＞

※関係した団体別に列挙（重複あり）。
※下線は田端及び隣接地に住んだことがある人物。
※カッコ内は職業、カッコのない人物は画家。

不同舎：小山正太郎が明治20年に開いた画塾
小山正太郎、中村不折、満谷国四郎、鹿子木孟郎、青木繁、萩原守衛、森田恒友、坂本繁二郎、石井鶴三、

方寸：明治４０～４４年に発行された美術文芸雑誌
石井柏亭、森田恒友、山本鼎、倉田白羊、平福百穂、織田一磨、坂本繁二郎

再興日本美術院：大正３年横山大観らが再発足させた美術団体
横山大観、下村観山、今村紫紅、安田靫彦

春陽会：大正１１年に設立された美術団体
森田恒友、山本鼎、倉田白羊、足立源一郎、梅原龍三郎、石井鶴三、木村荘八、岸田劉生、中川一政、萬鉄五郎

ポプラ倶楽部：明治の末に田端在住の芸術家が作った親睦の場
森田恒友、山本鼎、倉田白羊、満谷国四郎、藤井浩祐、針重敬喜(編集者)

天狗倶楽部：明治の末に結成されたスポーツ社交団体
押川春浪(作家)、中沢臨川(評論家)、針重敬喜(編集者)、弓館小鰐(新聞記者、作家)

老荘会：小杉放庵私邸で行われた中国古典の勉強会
公田連太郎(漢学者)、中川一政、岡本一平・かの子(作家)、木村荘八、出光佐三(実業家)、鹿島龍蔵(実業家)、石井鶴三

道閑会：田端文士芸術家などによる飲食歓談の場
鹿島龍蔵(実業家)、芥川龍之介(作家)、久保田万太郎(作家)、香取秀真(鋳金家)、下島勲(医師)、森田恒友、山本鼎、北原大輔(美術評論家・画家)、脇本楽之軒(美術史家)

その他
国木田独歩(作家)、田山花袋(作家)、大町桂月(詩人・随筆家)、小川芋銭、原富太郎（三渓。実業家・茶人）、村山槐多(画家・詩人)、水木伸一

2．放庵の日記

放庵は、滞欧中の大正３年、33歳のときから晩年に至るまで日記を書き綴っていました。若干の中断はあるものの、26冊からなる日記は、現在、栃木県日光市の小杉放菴記念日光美術館に所蔵されています。

小杉放庵日記（小杉放菴記念日光美術館提供）

日記の内容の一部については、 長男の小杉一雄氏らによって内容が紹介されていますが(注3)、このたび小杉放菴記念日光美術館学芸員の迫内祐司氏は、放庵と酒にまつわるエピソードを、放庵らの著作や放庵の日記などから拾い上げて論考しました(注4)。

人と記録― 小杉放庵とその日記について ―

その中で田端文士村の「道閑会」に関する日記記事が紹介されています。「道閑会」は、芥川龍之介をはじめとする田端文士芸術家たちの飲食談話の集まりで、他の芸術家村・文士村ではあまり見られない、作家や芸術家などという垣根を超えた交流の場でしたが、注目すべきは、大正11年2月18日条に「夕方道閑会（交換晩酌会）を催す　香取　鹿嶋　山本　芥川　客は木村荘八」と記していることです。メンバーとして田端住人またはゆかりの深い香取秀真（鋳金家）、鹿島龍蔵（実業家）、山本鼎（画家・版画家）、芥川、ゲストに木村荘八（画家）の名が挙がっていることもさることながら、日記の中で「道閑会」と記しているのはこれが初めてであり、それまで「交換晩酌会」と記していた会名を括弧書きしていることから、このころ会名が「交換晩酌会」から「道閑会」に変わったものと迫内氏は推測しています。日記によれば、放庵は「交換晩酌会」に大正7年２月以後６回出席したことやその顔ぶれが確認できますが（注５）、前記2月18日条に挙がっている香取、鹿嶋、山本、芥川及び放庵は常連であり、交換晩酌会から道閑会への継続性は十分に首肯できるところです。

そのほか、同日条の後段では参会者の持ち物をオークションした様子が記されていたり、大正９年2月25日条では、芥川宅で開かれた交換晩酌会に、同じく田端に住んでいた平塚らいてうを招いたらしいこともうかがえ（結局、らいてうは欠席）、これまで芥川の書簡や芥川の主治医で文人気質だった下島勲の著作などでわずかに知るしかなかった道閑会（交換晩酌会）の新たな一面を垣間見ることができるという意味でも、日記中に散見される道閑会（交換晩酌会）の記事は貴重なものといえるでしょう。

筆者は最近、小杉放菴記念日光美術館で日記（写し）の一部を閲覧する機会を得ました。日記は大正３年９月に起こされ、年末の帰国後一時中断した後、翌４年９月に再開されてからはほぼ連日記載されています。閲覧した数年間の記事からも、大正５年の元旦を姉、妻、子供４人、自宅敷地内の家作に下宿していた村山槐多（画家、詩人）、水木伸一（画家、俳人）らと雑煮で祝うなどといった家庭での様子や、田端文士芸術家のパトロン的存在だった鹿島龍蔵の注文に応じて墨絵を制作したことなど、田端での生活や交流状況がうかがえます。

放庵の日記は厖大なものですが、それだけに、田端に関することでいえば、放庵ら画家たちが明治末年に土地を借り、自分たちで造成したテニスコートやその周辺に植えたポプラといった西洋風の風物で彩られた「ポプラ倶楽部」や、中国古典への関心が高かった放庵が、昭和２年から終戦の年まで、中川一政、岡本一平・かの子、木村荘八、石井鶴三などの文士芸術家や出光佐三、鹿島龍蔵らの実業家のほか、官僚や学者たちと行っていた漢籍勉強会「老荘会」、そのほか芥川ら田端文士芸術家たちとの交流などについての記事は少なくないでしょう。田端文士村記念館としても、今後継続的に調査・研究を進めることが必要と思われます。

（注１）芥川龍之介「小杉未醒氏」（『芥川龍之介全集』第７巻、岩波書店、1996年、267頁）
（注２）山口昌男「小杉放庵のスポーツネットワーク～大正日本における身体的知」（『敗者の精神史』岩波書店、1995年、383頁）
（注３）小杉一雄「放庵日記について」（『三彩』第419号、1982年）、小杉一雄監修「小杉日記」抜粋（日本美術院百年史編纂室編『日本美術院百年史』第４巻、日本美術院、1994年）、丹尾安典「晴れてよかりき～『放菴日記』に見る春陽会の創立」（春陽会七〇年史刊行委員会編『春陽会七〇年史』、春陽会、1987年）
（注４）迫内祐司「小杉放菴にとっての酒と友～人似花酒如泉」（『酒運び』、社会評論社、2013年）
（注５）近藤富枝氏は、日記の大正７年６月22日条により、この日行われた交換晩酌会が放庵と芥川龍之介との初会見の場だったとしている（『田端文士村』、中公文庫、2003年改版、40頁）。

研究員今昔

田端文士村記念館の思い出

田端文士村記念館元研究員
黒崎　力弥

田端文士村記念館開館20周年、おめでとうございます。開館20周年と一言で済ませるより、擬人化して二十歳を迎えた青年と考えると、その人生の半分に私は関わったことになります。中高年ではなく、若い人にとって10年は長く、濃く、尊いものです。私にとっても濃密なものでした。そこで、つれづれなるまま思うところを書き留めます。

まずは、ひとこと散歩。田端文士村を語る上で欠かせないイベントと思います。当初は、文士芸術家ゆかりの場所を散策するだけでした。一定の参加者が見込める人気イベントとなりましたが、問題点がいくつかありました。特に、参加者に高齢者が多いにもかかわらず、厳暑厳寒期にも開催し、1時間半近く立ったまま進行するスタイルは、再考の余地がありました。研究員が担当することとなり、内容を見直しました。外回りは散策を中心として、説明などは出発前にレクチャーする。ホールを有効活用し、丁寧に行う。参加者は専門知識よりも身近なエピソードを欲しているので、分かりやすく、演出効果が期待できる機材をフルに活用する。以上の改善から、現在も続くひとこと散歩のスタイルが確立されました。回数を重ねるうちに4、50人、多いときには100人以上の参加が見込めるイベントとなり、担当研究員としてやりがいが生まれました。なによりも、これらを担当するのが実績のある学者でもなく、著名人でもない。無名の研究員にもかかわらず、人が集まり、楽しんでくれることに喜びを感じました。

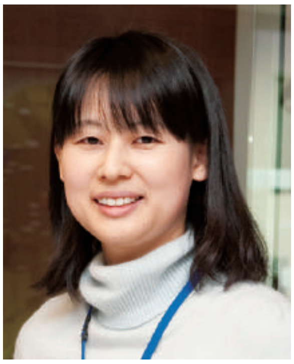
今では当たり前となっている区内小中学校への協力も、私が赴任したばかりのころは、社会科見学程度で、授業協力などありませんでした。しかし、ひとこと散歩等で実績を積み重ね、滝野川第一小学校や田端中学校をはじめとする授業協力が実現したのです。そして、首都大学東京をはじめとした区外活動に積極的に関わりだしたのも、ひとこと散歩、特にレクチャーの部が土台になったからと思います。講演会の渉外もほかでは体験できない貴重なものとなりました。講師陣をご確認ください。記念館への権威付けよりも、聴講するお客様が喜んでいただくことに主眼をおいて選んだ講師陣は、ほかの文学美術施設の追従をゆるさないものです。ほとんどが、担当者の熱意（ファン心理？）により開催にこぎつけたものですが、中には講師のスケジュールの都合などで実現にいたらなかったものもあります。名前をあげたら驚かれる人ばかりです。これは、熱心な現役職員の手により、開館30周年、40周年にいたる過程において実現すると期待しております。

最後に、記念館が名指しで揶揄されたことについて感じたことを。限りのある展示スペースや老朽化における様々な点が目に付いたのでしょう。芥川関係の某漫画以外でも、電子ツールで揶揄することなど昨今たやすくできるのです。しかし、東京都北区から反対側の大田区に移り、私が耳にした話では、悪いものなど一つもありません。田端文士村を訪ねて、その後日、馬込文士村を散策するお客様は少なくないのです。皆さま口をそろえて、田端ひとこと散歩がよかった、記念館講演会が楽しかった、と良い表情のままご感想を述べております。20年経た施設なのです。田端文士村記念館にはハード面におけるいくつかの問題点を抱えているのかもしれません。しかし、それを活かす人材、職員が優れていることを実感いたします。ハードにおける地域文化振興施設の問題点をいち早く人材でカバーした先駆けが田端文士村記念館であり、これから10年、20年存続するものと信じております。そのような記念館で10年勤められたことを誇りに思い、これからも田端文士村記念館の更なる発展と職員の皆さまのご活躍を心より期待しております。

研究員今昔

思い出
―田端文士村と馬込文士村の連携イベント―

田端文士村記念館元研究員
長谷川　理恵子



1．田端・馬込の両文士村について

大正から昭和のはじめにかけて、文筆を生業にする文士が集まって住んでいた地域がありました。いわゆる文士村です。この文士村は都内に数か所存在していました。代表的なものとしては阿佐ヶ谷・落合・馬込・田端などです。

これらの文士村にはいくつかの共通点があります。まず、鉄道や路面電車などの交通網が整備されており、交通の便が良かったといった点です。次に地形的に起伏に富んでいたり、自然が残されていたという点です。

その上で、これらの場所に中心となる人物がいました。例えば田端では、芥川龍之介が大正3年に居を構え、その後、様々な文士が芥川を頼って集まってきました。馬込では、尾崎士郎が居を構え、その後、様々な文士が集まってきました。

また、文士がこれらの文士村間を転居することもありました。日本近代詩の父とも呼ばれる萩原朔太郎は上京して間もなく、田端の谷田川沿いの家に住みましたが、その後、馬込へ転居しました。その親友で詩人・小説家の室生犀星は田端の中を5回も転居した後、馬込へと転居しました。

さらに、文筆を生業とする文士だけではなく、画家などの芸術家も集まり、文士と芸術家たちが分野の垣根を越えた交際をするなど、異文化交流の場であり、近代日本の文学作品、芸術作品の礎を築いた場でもありました。

2．田端と馬込を結ぶ特別企画について

田端文士村記念館では、開館まもなくから田端の文士・芸術家ゆかりの場所を訪ねる「田端ひとときの散歩」を定例で開催しています。平成22年度は「連携」をテーマに田端と馬込を結ぶ「田端文士村ひととき散歩特別企画　室生犀星の生涯～田端から馬込へ」を計画しました。

馬込文士村の文士たちの作品や自筆原稿、遺品などは大田区立郷土博物館に数多く展示されています。特別企画に当たっては大田区立郷土博物館に協力いただきました。

訪問先として馬込第三小学校を入れることとしました。室生犀星が情熱を注いで作った庭が馬込第三小学校に移築されています。同校の校歌は犀星が作詞をしており、今でも在校生に歌い継がれています。

散歩中の案内は、「馬込文士村ガイド会」に協力いただくことになりました。このように関係者と複数回の打ち合わせを経て特別企画の内容を詰めました。

3．特別企画当日

特別企画は、平成22年11月20日（土）に行いました。開始時間は午前10時、終了は16時と長時間に渡るイベントとなりました。午前は講演会を開催し、午後は馬込の散策案内を行いました。

午前の講演会は実践女子短期大学教授髙瀬真理子氏をお招きし、講演内容は「田端時代の室生犀星～芥川龍之介、萩原朔太郎との交流と文学～」でした。定員は50名でしたが、当日は席がすべて埋まりました。講演会では手紙や作品などから読み取れる3人の生き生きとした交流関係が印象的でした。

講演会終了後、散策のために34名の参加者が集まりました。まずは大田区立郷土博物館において、学芸員の方に展示案内を行っていただきました。その後、馬込へ向かいました。

馬込は広く、昔から九十九の谷（つくもだに）があると言われるように高低差があります。参加者の年齢層は幅広かったことから、参加者が無理をしないように歩くペースを調整しました。

犀星の旧居跡を見学後、万福寺で犀星の句碑2基、途中いくつか馬込文士ゆかりの場所の解説を聞き、北原白秋が馬込自宅周辺の様子を描いた『きょろろ鶯』を朗読しながら当時の光景を偲びました。

最後に馬込第三小学校を訪れ、移築された犀星の離れの建物と庭を見学しました。解散時は散策参加者からは満足したとの感想をいただきました。

4．さいごに

東京の街並みが変わる中、現代文学、芸術を確立した文士たちの足跡を後世に伝えていくことは重要だと考えています。定期的にこのような特別企画を実施していくことは大切だと思いました。

田端文士村記念館開館20周年記念事業

期　間	事業名	内　容	会　場
平成25年 6月2日(日)	開館20周年記念講演会 「文学散歩と世界」 講師：荒川洋治氏（現代詩作家） 	明治・大正・昭和の名作の舞台を、旅の記憶をまじえながらご講演いただきました。 	田端文士村記念館 多目的ホール
9月23日(月)	田端文士村を語る会	20周年を機に、田端文士村という歴史的文化遺産の一層の継承を図ることを目的として、昭和前半期を田端で過ごした文士芸術家ゆかりの方々から当時の思い出などをお聞きしました。 	田端文士村記念館 多目的ホール
10月25日(金) ～12月1日(日)	開館20周年記念展 「文士村博覧会」 	当館の代表的な収蔵資料を展示し、明治30年代から昭和戦前期に田端で暮らした文士芸術家たちの業績や交友を紹介するとともに、パネルにより田端文士村記念館20年の歩みをたどりました。 	田端文士村記念館 エントランスホール・展示室・多目的ホール
10月26日(土)	開館20周年記念講演会 「大正文学の幻想性 ～芥川龍之介､佐藤春夫を中心に～」 講師：川本三郎氏（文芸評論家）	芥川龍之介、佐藤春夫を中心に、大正文学についてご講演いただきました。 	田端文士村記念館 多目的ホール
平成26年 3月23日(日)	開館20周年記念講演会 「芥川龍之介が愛した 音楽たち（仮）」 講師:庄司達也氏（東京成徳大学教授）	芥川龍之介が愛した音楽をSPレコード、蓄音機で味わいます。	田端文士村記念館 多目的ホール

編集後記

文士村記念館開館20周年を機に、今までの記念館の活動を振り返るとともに、ゆかりの方々に記念館への思いを記して頂きました。ご協力いただいた皆様には心から御礼申し上げます。

また、鉛筆画の安住孝史先生には芥川龍之介の書斎をお描きいただきました（16頁掲載）。当時の写真をもとに、芥川の蔵書までお調べいただき、素晴らしい作品に仕上げて下さいました。原画も当館にご寄贈いただき、20周年の企画展にも展示いたしました。今後も芥川の企画展などで皆様にご覧頂きたいと考えております。

この20年間の歩みを踏まえ、これからの記念館がどのようにあるべきか、皆様とともに考え、取り組んで参りたいと考えております。今後も、より一層のご指導とご鞭撻をお願いいたします。

田端文士村記念館　館長　上山　勉

研究員　永井康友　田村亜希　木口直子

挿　絵

安住（やすずみ）　孝史（たかし）

昭和12年　東京都生まれ
昭和34年　色々なアルバイトをしながら画家を志す
昭和45年　銀座中林画廊にて個展
昭和53年　季刊『江戸っ子』誌に鉛筆による東京風景連載開始
昭和59年　仕事を辞め画業に専念
平成 2年　『鉛筆画の世界』(東京堂出版)出版
平成 5年　田端文士村記念館絵はがき「文士芸術家の住んだ街－田端－」原画制作

田端文士村記念館
開館20周年記念誌

編集責任者　　木口直子　（田端文士村記念館 研究員）
田端文士村記念館　開館20周年記念誌
平成25年11月4日発行
発行／編集　　公益財団法人　北区文化振興財団　田端文士村記念館
〒114-0014
東京都北区田端6-1-2
TEL.03（5685）5171
印　　刷　　川口印刷工業株式会社